

アイヌ民俗文化財  
ユーカラシリーズ5 1

金成マツ筆録 アイヌ叙事詩

# リクンナイの女

リクンナイ ウン マツ

蓮池悦子 訳

北海道教育委員会

# リクンナイの女

リクンナイ ウン マッ

## 目 次

扉	1
序文	3
目次	5
凡例と解題	9
1. 表題	9
2. 編集要綱	9
3. 脚注と引用文献略記号	10
<b>物語 リクンナイの女</b>	
第1章 トミサムベチ・シヌタプカ	14
第1節 妹を育てる	14
第2節 山猟への衝動	15
第3節 山城の外観	16
第4節 鹿を獲る	16
第2章 アトゥイヤビと	17
第1節 偽りの口上	17
第2節 六勇士をからかう	18
第3節 先駆けが殺されて	18
第4節 大将が登場した	18
第5節 空中戦	19
第3章 戦いの日々	20
第1節 ポンチュプカ村	20
第2節 ポンモシリ村	21
第3節 リクンナイ村	21
第4節 リクンナイ姫	23
第5節 悪口合戦	24
第6節 兄妹対立	26
第4章 棍棒撃ちと巫女戦	26
第1節 雑兵	26
第2節 棍棒づくり	27
第3節 巫女戦(1)	27
第4節 棍棒撃ち(1)	27
第5節 巫女戦(2)	28
第6節 棍棒撃ち(2)	28
第7節 棍棒撃ち(3)	29
第8節 巫女戦(3)	29
第9節 片手重片手軽	29
第10節 再生	30
第5章 リクンナイ姫の占い	31
第1節 はやる若者を押しとどめ	31

第2節	まず出自を解き明かす	31
第3節	実妹が禁断の恋をして	32
第4節	腹いせに沖の国々を歴訪し	32
第5節	クロッベツの男と結婚した	32
第6節	クロッベツの謀略	32
第7節	ポンヤウンベの嘆き	33
第6章	クロッベツ村	33
第1節	道行きでの変身	33
第2節	参集した沖人たち	34
第3節	仮病するクロッベツの女	35
第4節	リクンナイ姫のいたずら	35
第5節	ポンモシリ女の巫術	35
第6節	アトゥイヤ女の巫術	36
第7節	見破ったクロッベツの女	37
第8節	ポンヤウンベ参上	38
第9節	説論成らず	40
第10節	うち続く戦い	40
第11節	涙するクロッベツ姫	41
第12節	巫女たちの口論	41
第7章	シバツカイ村	42
第1節	秘めたる恋心	42
第2節	二人妻の提案	42
第3節	相妻承諾	43
第4節	鮭獲って腹ごしらえ	45
第5節	戦闘再開	46
第6節	報復の仕方	47
第7節	避難した相妻たち	48
第8節	実妹の悪態	48
第8章	再びシヌタプカへ	49
第1節	一夫二妻宣言	49
第2節	リクンナイ姫の決断	50
第3節	煮え湯の裁き	50
第4節	一夫二妻の日常	51
第5節	再び鹿狩り	51
第6節	固めの儀	52
中扉		55
本文 リクンナイの女		
第1章	トミサムベチ・シヌタプカ	57
1-1	妹を育てる	57

1-2	山猟への衝動	62
1-3	山城の外観	66
1-4	鹿を獲る	68
第2章	アトウイヤびと	72
2-1	偽りの口上	72
2-2	六勇士をからかう	74
2-3	先駆けが殺されて	76
2-4	大將が登場した	78
2-5	空中戦	82
第3章	戦いの日々	85
3-1	ポンチュプカ村	85
3-2	ポンモシリ村	89
3-3	リクンナイ村	93
3-4	リクンナイ姫	101
3-5	悪口合戦	108
3-6	兄妹対立	117
第4章	棍棒撃ちと巫女戦	120
4-1	雑兵	120
4-2	棍棒づくり	123
4-3	巫女戦(1)	124
4-4	棍棒撃ち(1)	125
4-5	巫女戦(2)	129
4-6	棍棒撃ち(2)	130
4-7	棍棒撃ち(3)	132
4-8	巫女戦(3)	133
4-9	片手重片手軽	134
4-10	再生	138
第5章	リクンナイ姫の占い	144
5-1	はやる若者を押しとどめ	144
5-2	まず出自を解き明かす	148
5-3	実妹が禁断の恋をして	149
5-4	腹いせに沖の国々を歴訪し	151
5-5	クロッベツの男と結婚した	152
5-6	クロッベツの謀略	153
5-7	ポンヤウンベの嘆き	156
第6章	クロッベツ村	159
6-1	道行きでの変身	159
6-2	参集した沖人たち	160
6-3	仮病するクロッベツの女	165
6-4	リクンナイ姫のいたずら	166
6-5	ポンモシリ女の巫術	167

6-6	アトウイヤ女の巫術	170
6-7	見破ったクロッベツの女	177
6-8	ポンヤウンベ参上	180
6-9	説論成らず	190
6-10	うち続く戦い	193
6-11	涙するクロッベツ姫	194
6-12	巫女たちの口論	196
第7章	シバツカイ村	199
7-1	秘めたる恋心	199
7-2	二人妻の提案	201
7-3	相妻承諾	206
7-4	鮭獲って腹ごしらえ	211
7-5	戦闘再開	216
7-6	報復の仕方	221
7-7	避難した相妻たち	224
7-8	実妹の悪態	227
第8章	再びシヌタブカへ	230
8-1	一夫二妻宣言	230
8-2	リクンナイ姫の決断	234
8-3	煮え湯の裁き	235
8-4	一夫二妻の日常	239
8-5	再び鹿狩り	240
8-6	固めの儀	243

# 凡例と解題

本ユーカラ(英雄叙事詩)の筆録終了年月日は1932(昭和7)年8月28日、金成マツ(1875.11.10～1961.4.6)満56歳の時です。(→資料3)

## 1. 表題

筆録原ノート(NELSON NOTE BOOK 22.8cm×16.8cm)の銀座伊東屋が製本した表紙には手書きで「XⅢ」とあり、INDEX欄には、金田一筆跡のローマ字筆記体で「1 Rikunnai um mat/2 Asaha turep ta otta Iraiike/3 Iwan Pon kamui, Ioka hotuy kar」および「I. リクンナイの女物語/Ⅱ. 我が姉 うばゆり採りに行って我を殺す物語/Ⅲ. 六人の小神にあとよびかけられる物語」と書かれています。(→資料1)

本編は「Ⅳ<金成まつユーカラ集>目録」(金成まつ筆録・金田一京助訳注『アイヌ叙事詩ユーカラ集Ⅰ』pp1-19 三省堂 1959)中の「45 Rikunnaiunmat リクンナイの女」に相当します。

金成マツは、原ノート第1頁1行目に「1. Rikunnai um mat」と表題を記してから本文を書き始めています。(→資料2)この原ノートは、金田一が送った1頁25行の大学ノートです。

本編は、ヤウンクル(本島人)であるトミサンペツ・シヌタプカの若き城主ポンヤウンペが主人公(語り手)です。山城で兄妹二人っきりで育つのですが、年頃になった実妹が兄に恋してしまい、人倫にもとる叶わぬ恋の腹いせに、あろうことか宿敵レブンクル(沖の国の人=外国人)の男と結婚して連合軍の一員として故郷に攻めてきます。理不尽な理由で起こした戦いに参加するのは祖先からの遺言にそむくとして、ポンヤウンペに味方したのが敵レブンクル一族である最強の巫女、本編のタイトルになっている<リクンナイの女>です。二人で次々に襲ってくる敵と団体戦、一対一でのウカラ(棍棒での撃ち合い)、片手軽片手重という心臓裂きの決闘、巫女同士の戦いフッサ(息吹)とあらゆる戦いが繰り広げられます。戦いの後半では神の国から降ろされた人々が住むシバツカイ村の神女が人間である主人公に恋し、その心情をあわれんだリクンナイ姫が相妻(二人妻)になることを提案します。そして三人で敵を皆殺しにし、不逞の妹も古来からの方法で罰せられます。こうして物語は故郷の山城で迎えた一夫二妻の初夜のシーンで終わります。

## 2. 編集要綱

- ① 物語の大意を把握するために「物語 リクンナイの女」をつけました。
- ② 本文では、原文にはない章立てを入れ見出しをつけ、行数字をつけました。
- ③ 原ノートの頁は欄外にゴチックで記しました。
- ④ 本文では、叙事詩の1行を4段に分け、以下の要領で整理翻訳しました。

【一段目】…ローマ字原文	1	I-resu yubi
【二段目】…片仮名		イ レス ユビ
【三段目】…分解訳		我らを・育てる その兄
【四段目】…対訳		イレスユビと

### 【一段目】…ローマ字原文

(a) 叙事詩のリズムに合わせ、1行が4音節ないし5音節に収まるよう行を改めました。但

し、金成マツの文体はしばしば1句が6音節以上になることがあります。

(b) 各行には、行数番号をつけました。

(c) 原文は人称接辞を中心に大文字で筆録されることもありますが、大文字の使用を文頭と固有名詞の頭に限定し、そのほかの大文字はすべて小文字に換えました。

(d) 原文では人称接辞は人称語幹と結合されて示されていますが、本書ではこの境界にハイフン「-」を挿入しました。

(e) 原文にはピリオドやコンマなどがほとんど用いられていません。本書では句読法を指示するピリオド「.」、コンマ「,」、コロンの「:」などを適宜補いました。

(f) 語、助詞はその境界で切りました。但し、助詞が連続するさい、この原則に従わないこともあります。語、助詞などが空白や改行によって途中で切断している場合はそれらの断片を結合しました。

(g) 長大な動詞が2行にまたがるときは、1行目の末尾にハイフン「-」を補いました。

#### **【二段目】…片仮名**

(a) 本書の片仮名はふりがなを意味しません。アイヌ語音声テキストにおける片仮名表記は耳に聞こえるとおりに表記することが一般的ですが、本書では一語を分解してそれぞれ半角空きに整理しました。例—イレス

(b) 金成マツの音声資料はきわめて少ないのですが、金成ノートにおけるローマ字原綴<sup>げんてつ</sup>には筆録者の発音が反映されていると推定される箇所もあります。その場合は原綴の読みをそのまま片仮名表記し(←)内に語源分解しました。原綴で二語が一語に綴られている場合は、語間を全角空きにしてそれぞれ半角空きで語源分解しました。

例—原綴 taninne

[一段目]…tan inne

[二段目]… タニンネ(←タン インネ)

[三段目]… この 大勢の

[四段目]… この大勢の

#### **【三段目】…分解訳**

ユーカラで使われている言葉＝雅語は語源分解してこそ言葉の意味の面白さが味わえます。本書では片仮名の下段に半角空きで語源分解訳をつけ、人称接辞と語幹の間には「・」を入れました。

例—原綴 Aniyeresu

[一段目]…an-i-y-eresu

[二段目]…アニエレス(←アン イ エ レス)

[三段目]… 人々が・我を・そこで 育てる

[四段目]… でわれは育てられた

#### **【四段目】…対訳**

一語としての意味は対訳でわかるよう心がけましたが、分解訳を併記してあるので、しばしば意識していることがあります。

### **3. 脚注と引用文献略記号**

訳註に引用した文献の略号と数字は以下の出典と頁です。

研 金田一京助著『ユーカラの研究二』(東洋文庫 1931)(札幌方言話者金成マツ口述・

金田一京助筆録)

研W 前掲書のうち、日高、沙流方言話者鍋沢ワカルパ口述・金田一京助筆録のもの

B ジョン・バチェラー著『アイヌ・英・和辞典第四版』(岩波書店 1938)

金 I ~ VIII 金成まつ筆録/金田一京助訳註『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 I ~ VIII  
(三省堂 1959~1968)

人 知里真志保著『分類アイヌ語辞典人間編』(『知里真志保著作集別巻II』平凡社 1975)

植 知里真志保著『分類アイヌ語辞典植物編・動物編』(『知里真志保著作集別巻I』平凡社 1976)

地 知里真志保著『地名アイヌ語小辞典』(北海道出版企画センター 1984復刻、初出; 1956)

語法 知里真志保著『アイヌ語法概説』(『知里真志保著作集4』平凡社 1974、  
初出; 1936)

教I~28 金成マツ筆録/蓮池悦子ローマ字翻刻片仮名整理/萱野茂分解訳と和訳『アイヌ  
民俗文化財ユーカラシリーズ』 I ~ XX、21~28 (北海道教育委員会 1979~2006)

教29~31・34・37・40・45・46 金成マツ筆録/蓮池悦子訳『アイヌ民俗文化財ユーカラシ  
リーズ』 29~31・34・37・40・45・46 (北海道教育委員会2007~2014)

教32 金成マツ筆録/高橋靖以・切替英雄・蓮池悦子訳『アイヌ民俗文化財ユーカラシリ  
ーズ』 32(北海道教育委員会 2009)

聖 久保寺逸彦編著『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(岩波書店 1977)

久 久保寺逸彦編『アイヌ語・日本語辞典稿』(道教委 1992)

萱 萱野茂著『萱野茂のアイヌ語辞典』(三省堂 1996)

田 田村すず子著『アイヌ語沙流方言辞典』(草風館 1996)

資料 1

INDEX

PAGE	PAGE
1	<i>Rikunai umi mat</i>
2	<i>Aomha tusepa ta oha uaike</i>
3	<i>Uan pon kumui, Uka hotuye kar</i>
	I. リクナイの女の物語
	II. 我が姉 3日ゆり 採りに行った我七娘の 物語
	III. 六人の小神にあとを分けたる物語

資料 2

1. Rekunpui sumi vunt.  
 Nekon thichi wa shiko kuniye baro  
 kuniye. Ane nuntya. tumboro  
 chise yepsoorke. Akoyaispikasame  
 Atureshipe tanyepo feye kame yeta  
 ruto tupsui, chimbori wa Ash  
 Resui chimbori wa Ash kankhe  
 kachie, kankhe. Akoy viraun ushi  
 kame pesho, kankhe utara shirist  
 An kame tumboro. chise yepsoo  
 beburri, tura, neri shiribu shp

資料 3

son. Akothikirba peikeruchi kuniye  
 Inunayee Aneshopnyee. Atiker  
 orunpoo shicho yepsoo kame Uei  
 An shipi. tura bakuro. Ichopora  
 kotte shiko orunpoo shicho yep  
 so. ppehara Uko hichura kame  
 kankhe kankhe kame nuntya  
 An tumboro. kuniye shirist sothi  
 Inunayee. kotte sothi. sothi yepsoo  
 kuniye Atureshipe utara yepsoo  
 orunpoo kankhe yepsoo kame pishika  
 kankhe kankhe kame nuntya kame  
 shirine An.

昭和七年六月廿八日北地通巻別冊(成下)

## 第1章 トミサンベチ・シヌタブカ

### 第1節 妹を育てる

どのようにして生まれ育った者がわれなのであるうか。この大館おおだての中でわれにかえった。妹は今ようやくはいはいして、下座でよちよちと脚を二度あげ三度あげして立ち上がったたり尻餅をついたりしては、キャッキョと笑っている。毎日毎日われらが一緒に遊ぶ声でこの大きな館の中はにぎやかだった。

誰がつくった食事なのか、上等な食べ物湯気を立てて毎日毎日いつもわれの枕辺に置いてあって、われはそれに拝礼してからいつもいただいていた。本当においしくうまかった。

平穩無事にいくつもの歳月たくさんの年月が過ぎ去った。

われは妹を大切に育てた。今はもう床に降りて、右座から左座まで走り回っている。おもちゃの小矢とおもちゃの小弓がわれの枕元にあったから、われが大きな柱小さな柱に矢をコツンコツンと当てると、妹は走ってその矢を抜き取りに行く。妹は立ったり坐ったり忙しい目にあいながら、われらは爆笑しあう。そのようにしてわれらは成長した。

今はもうわれは陰毛が生え揃い、着物の裾前が乱れるのを気にする年頃の少年になった。

われは位の高い者であるらしく、もやに身を包まれていた。

夜ともなれば、われと妹は一枚の夜着をひっぱり合って寝、昼になればいっしょに遊んだ。

今、わが館の内部をしっかりと眺めて見ると、驚いたなあ、この大館はりは梁の下の方までぎっしりと立派な神器しんきじゆうきで飾られている。上座の東端には渡来の行器ほかいやアイヌ造りの行器シントコ、渡来の筐はこやアイヌ造りの箱スオブが入り交じった宝列が低い断崖のように壮麗に連なっており、その上一帯に神々しい光が輝いている。

宝列上方の壁には、吊り帯エムシアップに差した首領エムシの太刀がたくさんかかっており、吊り帯の先の四角い布エムシブサがゆらゆら揺れていた。

宝壇のすぐ近くには、立派な台座があって、台座の周りには幅広の平金ともえが取り付けられていた。平金の表面一帯にたくさんの錦モレウの巴紋ひらめが飾り付けられており、その上一帯に靈なる光がピカピカひらめ閃いていた。

われがこのようにして妹を育てながら暮らしていたことを思い出したところで、今ふとわれに返る。

金色に輝く床は、炉から遠く離れた奥の方の床が低く見えるほど広く、炉のかみてまで明るく輝いていた。立派な炉ぶちが入り口まで長く延びている。

右座がわには、宝壇の下端から漆塗りの手筐てばこの大きな列が下座の隅まで連なっていた。その前には女性用の美しい枕があって、その前には、どのような顔つき口つきの方のお手になるものなのか、神々しい金欄きんらんの着物が上段の掛け棹と下段の掛け棹たわが撓むほど掛かっており、その上一帯にたくさんの神彩いくつもの神彩がピカピカ閃いていた。まったく好ましく感動的だ。

あるときから妹を右座に座らせ、「火はこのようにして焚き、このように料理する」とわれは言った。

「女の子がこれくらい大きくなったら男と一緒に寝ないものだ。これからはここにそなたは寝るのだよ」と右座の掛け竿の下にある美しい枕を見せながら教えると、妹は非常にいやがり、しゃくりあげて泣きながらプンプンして顔をそむける。心の中でおかしがりながら、われは妹をなだめすかし、そなたの将来のためなのだと言い聞かせ、片付けや掃除の仕方も教えた。

毎晩枕の上で妹の忍び泣く声が聞こえていたが、独り寝に慣れさせるためにわれは聞こえないふりをしていたところ、今はもうあきらめたらしく、毎晩正体もなくぐっすり健やかなびきをかいて眠るようになった。そんな様子ふびんが不憫でならなかったが、男が妹を一人前に立派に育てることはこうあるべきだと思ったから、ほんとうに安堵した。

妹は毎日毎日雑な掃き掃除にはげみ、つたない炊事に一生懸命取り組んでいた。

あるとき「さあ、物入れストウケトウシ袋ツケトウシに絹でも何でも女が使うべきものがたくさん入っているのだよ。出してきた刺しゅうの運針を自習しなさい」とわれが言うのと、ただふつうに嬉しがるものならいいのに、大喜びで奥へ駈けこみ、嫁入り道具である女の宝物入れに手を入れ、歓声をあげながら絹を取り出した。それから縫い針で布を重ね縮め重ね縫った。そのたびに大きく膨らんだり小さくゆがんだ拙つたない刺しゅうを、われに向かって上下に振りながら見せた。

われは自分の鼻や口の前に拳こぶしをあてて驚きの仕

草をしながら上手だと褒める。妹は褒め言葉をすっかり本気にして針仕事に精を出す。

われは可笑しくてしかたなかったから、後ろへ振り向いてクスクスおかしさをこらえた。妹はそれを知ると、仰向けにひっくり返って足をドタバタ地団駄踏んで悔しがり、泣きわめく声ワァワァワァ。

そうするから、われは自分の頭を搔き搔き、

「びっくりしたなあ。そなたは何を泣いているんだい？内女中や外使いの下女たちが何か言っていたことを思い出してわれは笑っていたのだよ。そなたがこんなにも上手なことを感心していたのに、まさかまあ、それを笑っているのだと思ったのではあるまいな。全然違う違う」

と言ったところ、妹はこのお世辞をすっかり本気にして、涙目をふいてまた針仕事に懸命に取り組んだ。

われの方も、毎日木を刻んだり削ったり、楽しく彫刻にはげんでいた。

どこの村や国に妹に匹敵するほど美貌の者がいるだろうか。まだ幼女なのに、ほめる言葉も見つからないほど美しい。吐く息も半分吐いてはやめ打つ心臓も半分うたせてやめるほど、われは慈しんで育てた。

毎日毎日妹はあること無いこと虚実とりませ、口まかせにおしゃべりした。なんとまあ妹は饒舌だったろうか。まるで口が二つも三つもついているみたいだ。われはフムッと気合いの声を発して相づちを打ったり、大笑いしたりしながら聞いていた。

## 第2節 山獺への衝動

そのうち、わが着衣であるらしい畳まれた金糸銀糸の豪華な衣装が尾錠付き帯で縛ってあるのが目に入った。上等な兜や神授の太刀も一緒に縛ってあるようだが、きらめく光や靄のせいで見ることもできない。

ある日ふと山の方へ気が向いた。今はもう妹は一人で煮炊きもできる。われがたった一日留守にして山狩りに行ったなら、一匹の小狐でも捕れるかもしれないと思えた。

それゆえわれは台座から立ち上がり、掛け竿から美しい着衣の大きな包みははずして包みを解いた。豪華な衣装をさっと広げて見ると、襟や裾まわりに幅広の平金がぐるりと巡らされ、肩から垂れている

鈴は着衣の半ばまで下がっていて、半ばから垂れている鈴は裾までずらりと下がっている。まったく好ましい。

われは拝礼してから、体の上にさっと広げて身につけ、尾錠付き帯を胴に巻きつけた。帯に下がる神授の太刀は鞘長にそり返り、鞘の表面には雷神の夫婦神が絡まり合い、雄神は鐙の上に角を高々と起こし立て、雌神はそれに顎を差し交わして、まるで生きている神のように居座っている。われは驚いてしまった。

鞘の真ん中には金の小さな狼神が金色の毛がピカピカ光らせ、尻尾を長く伸ばして生きている神のように居座っている。まったく心動かされる。

鞘の末端には夏毛の狐一冬毛が脱毛して痩せた胴体はたくさんのしわの波が柴木を並べたようにうねうねと伸びており、冬毛が抜けた裸毛の耳はその先端にポヤポヤと一房の毛が残って突っ立っている。口は下あごと上あごが食い違いに交叉し、鋭い牙が生えている。目の色は恐ろしげな真っ黄色だ。尻尾の芯の先端にも抜け残った毛の束がくっついていて、まるで生きている神のように居座っていて驚いた。まったく気分がいい。われは拝礼してその太刀を腰に下げた。

薄造りの上等な兜は、表面に鈴なりの木鈴と鎖の束が数多く付き垂れ、その上一帯に靈光がピカピカ輝いている。まったくもって人間の着衣ではなく神の衣装でもあろうか。われは驚きながら拝礼して頭に被り、兜の下げ緒をきりりと締めた。

驚いたなあ。ただでさえ尊貴な生まれらしいと思っていたところに、今武装を整えてみると、ますますもって普通の人間ではなく、本当に尊貴な姿であることをはっきり自覚した。

負繩かけた矢筒をわが背にパッと投げあげ、弓束に桜皮をまいた弓、その握りの真ん中をむずとつかみ、われは上座から静かに大股でゆっくり歩いた。腰に差した太刀は、鞘のこじりをずるずる曳きずるほど身に余る大きさだ。われは刀鐙を響かせた。

妹は非常に驚いたものだから、目を瞠ってわが身体をじっと見つめ、泣きながら立ち上がった。

「お兄ちゃまあ」

と絶叫してわれに無理やりしがみつки、

「行かないで！お兄ちゃまと毎日二人っきりで、

すっかり頼りきって暮らしていたのに、どこかへお出かけなの？お兄ちゃまがどこかへ行ってしまったあとに、あたしはひとりぼっちでいられやしない。あたしもお兄ちゃまと一緒に行くわ。ねえねえ、どうか連れて行って！」

と言ってわれにぶらさがった。われは首から上が見えなくなるほど深く何度もここにこうなづいて、妹の小さな手はずしながら、

「これこれ妹よ、われくらいの年頃の男は狩りをするものなのだよ。今日急に山に行きたくなかったから、今こそわが狩り場を歩き回って、狐か小兎でも捕れたならば非常に喜ばしい。ひょっとして神がわれを憐れんで鹿にでも遭わせてくださったならば、脂身たっぷりの美味しい肉を土産に背負って帰るぞ。淑女というものは相手の言葉をよく聞くものだよ。そなたはわが言いつけを守って夕方まで留守番していなさい」

とわれが言ったところ、なんとまあ聞きわけがいいことか。涙の間から目をあけて、歓声をあげながらすぐ元いた場所に座り、

「わ～い、それならお兄ちゃまは早く山に行ってお土産を背負って帰って来て」

と言うから、われがどこかの山からすぐにでも獲物を背負って戻ってくると思っているみたいだ。妹の気持ちが可哀想でわが心は泣き死にしそうなほどつらい。

われは母屋入り口のすだれをふうわり揺らして玄関土間を通り、館の外へ出た。

### 第3節 山城の外観

あたりを見回せば、低い所で住んでいたと思っていたのに、天空上にそびえる弧峯の山頂に重なり建つ美しい館とりっぱな柵構えの中でわれらは暮らしていたのであった。

館の茅葺屋根の上段と下段の葺き口には幅広の平金がぐるりと巡らされ、平金の表面にはたくさんの美しい巴紋様が飾り付けられている。巴紋の間には鈴と木鎖の房が数多く付き垂れ、鈴が鳴る音は女性の声のように細く高くにぎやかで、木鎖が鳴る音は男子の太く低い声の如く様々に唱和する。まったく好ましい。

山城をめぐる柵木の新しくて長い割木は天空上に頭が高々とそびえ、古くて短くなった割木は柵木の

間に隠れている。割木に縛りつけた長い横木は割木の高さによって高く低くうねり、短い横木は地面とともに高く低くうねる。

目を転じれば茅葺き屋根の上の葛目も下の葛目も時代を経た家ゆえ小鳥の巣と化して向かい合っていた。葛目にあたる風はシュウシュウ鳴り、山城に当たると風はパタパタはためき渡り、地面に当たる風は轟々と鳴りとどろいている。

館の東側にそそり立つ祭壇はまるで林さながらである。山城から浜手へ下る道路はうねうねと幾重にも折れ曲がって降っていて、山城の東端から山へ入る黒土の道には獣の足跡がくろぐろと続いていた。

海面は明るく輝き、風のおもてはどこまでも真つ平らで海鳥が水に潜って餌をあさる声がにぎやかだ。トミサムベチの流れ下る川面はしらじらと輝いて、河口は大海原へ幅広い瀬となって流れ込んでいる。まったく好ましく感動的だ。

われは、物見櫓の上に座った。わが居城はほんとうに感動的な美しさだ。どのような家系のわれなのか、神の館を遙かに超えるような館で物心がつかないうちから育っていたのだから、ほんとうに不思議だ。あちらこちら振り返り見返し、あらゆる周囲のところをすっかり気に入る感心した。

物見櫓の上からわれは鳥のように飛び立ち、山へ入る道の上方を旋回した。それと同時にわれの頭上で不意にドーンと爆発するようなバリバリッと裂けるような音がし、数々の重い位の高い神が轟然たる音を発したので、驚いてしまった。

### 第4節 鹿を獲る

われは、一直線に川の水源に向かい、狩り場の上に降りた。話に聞いていた牝鹿というものの大群が、われに尻を向けてまわりを跳びはねている。しかし、われは知らん顔をして、川端の木原の上に大股で歩いて行き、片手を大きく振りながらたくさんの狩り場を通り過ぎた。わが故郷の狩り場の美しさをなんと愉快に思ったことだろうか。あちこち眺めながら行ったところ、上流の川添い沃野に、世に言うところの牝鹿と称する大きな牡鹿が、遠くの草を食べるには両角を高くのぼしつつ、近くの草を食べるには口が下に低くなるから両角をぬっと高くもたげつつ、のんびり草を食べていた。

下手な狩人は近寄りすぎて逃がすものだという。

それで、われは大股にあとずさりして、大木の陰にぴったりと張りついた。背負い縄がついた矢筒を背中からおろし、ちょうどいい矢を選んで弓につがえた。片脚を遠くにつき立て、片脚は近くにつき立てて、下唇を噛んで矢に目をあて、大牡鹿シヤブカにしっかり狙い定めた。われヒョーッと射放てば、飛び行く矢羽根は高い木の幹の中ほどをかすめ、低い木の梢のいただきを風のように通り過ぎて標的に向かってまっしぐら。大牡鹿の肩のはづれを射切って黒い矢羽の先がズブリと獲物にのみこまれた。大喜びでわれは跳ぶように走り寄る。

大牡鹿は川下へ川上と沃野の草を倒して、もがきながら打ち倒れ、まもなく死んだ。すぐそばまで行って見ると、まさかそうなるとは思わなかったのに、獲物は何かわれの噂でも聞きこんでいたものなのだろうか。われをじいっと下からすくい見る。凶暴な怒りがわいてきて、われはかかとで何度も踏みつけた。そうしたのにもどこまでも同じ様に目を開けている。われは不思議に思った。それでよくよく見たところ、どうやら山の獲物は死んでいても目を開けているのがわかった。ほんとうに薄気味わるい。

われは、大牡鹿の頭の方に行って、二度三度と両手の掌を上に向かってゆっくりと静かに上下してから、合掌の形で両手五指の指頭を摩り合わせ、「今日初めてわれは山猟にきた。まだ狩猟のやり方も死んだ獲物の姿もわれはよく知らないゆえ、鹿の神に対して無礼千万なあつかいをした」ということを詫びた。さてそれからどうしたらいいのか、見当がつかない。皮の剥ぎ方さえ知らない。われは大牡鹿の身体をぐるりとまわって観察し考察してから、こうしたらいいのかも知れないと思って、太刀を鞘からサッと引き抜き、鹿の前足と後ろ足の内側の皮に筋を入れた。剥いで見ると、なんとまあ大牡鹿神チコイキブカムイはたっぷり脂がのって丸々と肥えていたのだろうか。まるっきり脂身の塊みたいだ。われは喜んだ。神が見守ってくださった故大きな獲物を得たのだ。われは少し得意だった。こんな土産を背負って帰ったら、妹は大喜びするにちがいないなあ、われも早く妹と一緒に新鮮な肝臓フィレを食べたいなあと思った。

妹が喜ぶ様子や姿が、手に取る如くははっきり見えるように思いながら、われが手早く皮剥ぎしていたところ、いったいどうしてなのか、急に何となくわ

れの魂がびくびくおびえた。今にも何かはわれを斬り殺し突き殺しそうとしているように思われた。なんとまあ気味悪かったろうか。

頭上の天空を端から端まで眺めても、何の雲影や鳥影など、怪しげなものの気配や動き回る様子は少しもない。川端の木原の間を遠く近く、上や下を隅々までよく見調べても全然何にも見えなかったが……。

## 第2章 アトゥイヤびと

### 第1節 偽りの口上

まさかまたそうなるとは思わなかったのに、川上の沃野に少なからぬ人影が忽然と出現してわれの方へやって来た。連中はわがすぐそばの倒木に腰掛けた。

われは見ないふりしながら目の隅から見ると、今初めて男と言う者を目の当たりにしたのだ。まだ年ボナイス若いお方で、一歳ほどわれより年上の若者が、金糸銀糸の豪華な衣装を襲ね着し、尾錠付き帯を胴に巻き、神授の太刀を腰に下げている。美々しい兜の下げ緒をきりりと締め、兜の縁からは神々しいお顔が輝いていて、全身がもやに包まれていた。すぐそばには若い娘がりっぱな良い物ばかりを襲ね着し、どこからどこまでほれぼれするほど美しい。兄妹に違いなくそっくり同じ目付き同じ眉つきをしている。二人とも倒木に腰掛けていた。

そのそばには六人の武者むしやが武具に身を固めて太い生木の杖をつかってずらり立ち並んでいた。

全員がわれの方をじいっと眺めて濃い靄の真ん中に向かって靄を散らしてもわれの姿を見ることができない。どこやらの族長らしい若者がこう言った。

「これこれ、わが家来どもよ、よく聴け。あそこで今皮剥ぎしている者の所に行って、『男子がしてはいけない無礼なことの一つは、おのれの村の名を隠すことだから名乗るが、わが村はその名も有名なアトゥイヤであって、男の兄弟は自分だけで妹が一人いる。今日は好天気なので、妹と家来どもを連れて山狩りに来た。たくさんの狩り場を通りすぎて来たところ、どこの村人か国人かがわれらの獲物を先取りしまった。さあさあ！お主ぬしが助かりたいなら、お主のつまらぬ獲物を賠償アシンクとして差し出せ。そうしなければ二切れ三切れに切り刻んでやるぞ』と言ってこい」とその悪党が言うのをはっきり聞いた。

ただそれを聞いただけで今日一日じゅうグラグラ  
国土が揺れるほど驚いた。アトウイヤならよくは知  
らないが沖人の村であろうに、ずいぶん遠い本島人  
の獵場に狩りに来たと言うのは、まったくの虚言で  
あることが明らかだ。われに戦いを仕掛けようとする  
言いがかりだなと思っていると、六人の家来たちが  
まっしぐらにやって来て、わがすぐそばに太い生  
木の杖を立て、棹のような杖にあごをのせて、あた  
かもわれが聾者のごとく異口同音に主人からの伝言  
を言い立てた。

## 第2節 六勇士をからかう

われは聞こえないふりをして、彼らの方に尻を向  
けたままでいた。すると今度は前方に回ってきて何  
度も何度も同じ言葉を繰り返した。

六人の武者はわが靄の中心に向かって靄を散らそ  
うとするから、われはわざと身を包む靄を固くした。  
「いかがかな、否か諾か返事なされ」と彼らはわれ  
をせきたてる。猛烈に腹が立ってきて、われは鹿の  
腹から糞をひとつかみ素早く掬い、いきなり六武者  
の半顔めがけて投げ散らした上でこんな怒号をあげ  
る。

「おや、これはこれは！森や林をねぐらにする鳥た  
ちは皮剥ぎのあとに辺りにやってくるものだが、今  
日は鹿の糞が食いたりなかったのかな？それとも何  
か大きな異変が起こる前兆なのか？こんなくだらぬ  
ことばの調子から察すれば、糞を貰いたがって言っ  
ているのか？さあ、お前らが食べたいものを腹いっ  
ぱい喰って満足せい」

とわれは言って、六武者の顔面から口の中までベチ  
ャベチャの鹿の糞まみれにしてやった。突然そうさ  
れたものだから、奴らは驚いてカーッカーッ、ペッ  
ペッと唾を吐き顔を拭い、全員ゲーゲー、エッエッ  
とからあげして目玉だけをぎょろつかせている。見  
るだけでもおかしくてわれはクスクス笑った。

六武者は大いに驚き顔を見合わせて、  
「何が怖いことかを知っているのが人間なのに、こ  
んな青二才のやることは、何とまあいまいましい！  
われらが勝手に奴を殺せるのであれば、ただちに叩  
き斬りめっちゃ切りに刻んでやるのだが、われらは  
仕える主人に忠実に従うものであるゆえ、そうもい  
かない。今好きなように振舞っているお前であって  
も、わが主人と一騎打ちして、もし汝が完敗したら、

生涯の間生き恥をかかされようぞ」

と数々の悪口雑言を吐き散らしながら、遙か遠くに  
走り去って、主人にかくかくしかじかと言上した。

## 第3節 先駆けが殺されて

アトウイヤウンペが笑いながらこう言うには、  
「また行って『本当にまあどこに村を持って住む人  
かどこの国にいる人か知らないが、ひどい侮辱をほ  
ざいたな！わが結構な申し出にあくまでもさからっ  
て、われの面子をつぶすのであれば、樹の下で一対一  
で立ち合う決闘をしよう。もしや汝がわれに完敗し  
たら一生涯の恥をかかせてやるからな。それが嫌な  
らわが提案を承諾せよ』と行って伝えよ」

そう言ったところ、またもや奴らがまっしぐらに  
やって来て、われのすぐそばに杖を立て復唱する。  
狂うばかりの怒りが猛然とわき起こってきた。

飛鳥のようにとんで、われは生木の杖をむずとつ  
かみ全員の脚を突き転ばした。奴らは急にやられた  
ものだから、舟材にする大木がひっくりかえるさな  
がらにドタドタ倒れる。その上にこの怒号の言葉を  
燃え上がらせた。

「おや、これはこれは！林をねぐらにする鳥たちは  
まだ鹿の糞が食いたりなくて、われが急いで剥いて  
いるあいだにも、くたばりたくて遠慮なしに何度も  
言ってくるのか。お前らがしたくて小五月蠅くした  
のだから、こうしてやるぞ。それだけでも本望だど  
思え」

とわれは言って太い生木の杖を高くサッと振り上げ  
パッと低くなぎ払い、奴らの顔や頭を殴りつけた。  
血がほとぼしすると、わが心カッとする。わが手元の  
刀が一閃すると、ちぎれた断片が左右へさっと散り、  
次々と死にゆく魂の天に昇って行く音がゴロゴロと  
轟く。

たった今われは初めて人を斬り殺した。気分も悪  
くなったが、同時に猛烈に腹も立ってきた。アトウ  
イヤウンクルがいかなる理由に基づいて挑戦してき  
たにしても、あまりにもひどすぎる。われが年少と  
侮って対応したことはほんとうに腹が立ったのだ  
が、これで少しはうっぷんが晴れたから、われはま  
た牡鹿の皮剥ぎを再開した。

## 第4節 大将が登場した

アトウイヤウンペはフムと氣勢を挙げて立ち上が  
り、わがすぐそばに滑るようにやって来た。大いに

腹を立てているものだから、眼が二つの星のようにギラギラ光っている。靄の真ん中を散らしてもなかなか人の姿が見えないので、ますますいまましく思うらしく、こんな怒号の言葉を上げた。

「アチカラ、アヤカンナ(ああ嫌だ嫌だ)！小陸人のくされ陸人め。沖の島人として自ら望んで死にたいとは思わないのに、あちこちの海を回ってわれら沖人を皆殺しにすることが腹立たしくて、いつか勇者同士二人で一対一で立ち合う決闘やお互いの肝つ玉比べをしようと思っていたところ、小陸人が今日山狩りに行くと聞いた。それゆえこっそり後を付けて来た。もっと大人である者を言っているのかと思っていたのに、見ればまだ赤ん坊みたいな奴だ。勇士で族長のわれが、こんな年端もいかない者を相手に戦いを挑もうとしたとは自分自身でも呆れる。それでそつと戻って来て小陸人が一人前の男に成長したと思ったときに、再び来ようと思っていたのだが、帰る前にちよいとからかい挑発してみようとしたところ、これが本当に奴の憑き神の強さなのか！何とまあ恐ろしや恐ろしや！わが六人の家来たちはどこに行ってもかなう者は一人もいなかった勇者だったが、全部小陸人に尋常でない殺され方をした。そのように振舞うそなたなれば、互いに立ち合うことにしようぞ。そなたはわれと対戦すべき時がきたようだぞ。絶対アトウイヤウクル、このたぐいまれなる勇者に負けるなよ」

ただ聞いただけでわれは驚いた。自分が推察した通りのことを言ったから猛烈に腹が立つた。しかしわれは知らん顔して、地に深く根をおろした柱のようにどっしりと落ち着いて、皮剥ぎを続けていた。

アトウイヤウンペは激しい太刀をわれに振りとはばしてきた。むざむざ死んでたまるか。獲物の大牡鹿があたかも幼い子であるかのようにわれはむずとつかみ、川下の沃野に音もなくすうと移動し、前と同じように皮剥ぎに熱中しているふりをした。

アトウイヤウンペは振り向いて目を瞠っている。自分の鼻や口の前に拳をあてながら、憤る声が割れるが如く聞こえ、まっしぐら襲ってきて、また激しい太刀をわれに振りとはばす。われは川上の沃野に鳥が木の枝に止まるそっくりに舞い降り、相変わらず皮剥ぎに忙しく立ち働いた。奴は、われが飛び去った後の地面を深く切り込み、川上の沃野にいるわれ

の姿を目撃して、ぶったまげる声が聞こえてきた。われはわざと川上や川下の沃野に何十度も何百回も追いかせさせた。

今はもうアトウイヤウンペは脂汗を浮かべながらピューピュー激しく息をついている。われは心の中で囓う。しかし、『いつまでも斬るべき相手をお前は殺さないつもりか。お前がひとり遊びをしていて何かいいことがあるのか』とわれは自問自答して、大牡鹿を放り投げ、まだ氣勢をあげているアトウイヤウンペにこんな痛罵を浴びせてやった。

「おお、何をぬかすか。アトウイヤウンペよ、何回も何回も言え。聞いてやるぞ。まだ背負われるほどの童、赤児みたいな、遊びさえも知らない子供が、どこにまあ、方々の海を超えて戦さ仕掛けまわり、汝の同胞を斬り殺したってか？われから盗むために首領ぶりも勇者ぶりもよい者がはるばる国や村を越えてわれをつけて来たんだな。どのようにでも好き勝手に振舞うお前だとて、もしこの小陸人に汝が負けたならば、生涯の間生き恥をかかせてやるぞ。気張ってかかって来い」

と言いながら激しい太刀を振りとはばす。敵の大怪物は一直線に天空上に向かって飛び上がり、途中で影がふいと消えた。

## 第5節 空中戦

倒木に腰掛けたまま、アトウイヤのくされ女馬鹿女は、ずいぶん前からわれの方をじろじろ眺めていた。ますますわれは腹が立つ。しかし彼女もアトウイヤウクルにすぐ続いて天空上にふいと消えた。狂うばかりの怒りがわき起こる。とり逃がしてなるものかとわれはぴったり続いてあとを追う。

それと同時に、わが頭上で憑き神たちが音を立て、今こそ数々の重い神々たちが押さえつけるような音を轟かす。尻尾がついているような竜巻、数多の旋風が空からおおいかぶさってくる。林へ当たる風はシュウシュウ鳴りわたり、折れやすい木の折れる音がガリガリメリメリ。強く折れにくい木はよくしなう蔓や弾力ある細枝のように地面へ伏しなびいては撥ね起きる音がシュウシュウ。地べた表面を風が剥がしてゆき、ひどい土ぼこりひどい草の葉っぱを吹きあげ吹きあげ、烈しい吹雪のつむじ風をなしてまっ黒な雲となり天下一面真っ暗闇になる。われは驚いてしまった。

アトウイヤウンクルは妹アトウイヤウンマツと一緒にいくつもの雲間を逃げまわった。われの刀のほんの少しも触れる気配もない。時には太刀を鞘に収めて背中の方にグイッと押しやり、われが何度も握りこぶしを突き出すと、二人はわが指のあいだを風のように吹きぬけ、殺すこともできない。斬り合いも殺し合いもないままにわれらは追いかける。

今こそ初めてわが憑き神が強めるその音は、神が造りし天上の国土が崩れ落ち粉々に砕け散るかのようだ。地面に当たる風は轟々と鳴りとどろく。見ればアトウイヤの奴は水に長くつかって白くふやけた昆布そっくりになり、からだじゅうをブルブルふるわせている。

われは心の中で嘲り笑った。あんなにもうぬぼれていたのに、その振る舞いざまがあまりにも意気地ないから、あきれてしまう。奴は太刀の柄頭に手もかけられない。とうとう妹と二人と肩を並べてどこへやら逃げだした。

### 第3章 戦いの日々

#### 第1節 ポンチュプカ村

見れば何という郷なのか、たくさんの人家がわが眼前に高々とせりあがってきた。

息も絶え絶え声もとぎれとぎれに、アトウイヤウンクルの叫ぶその声がこうあるには、

「これこれ、ポンチュプカびとよ。男兄弟は汝一人だけだが妹が一人いるであろう。かくかくしかじかのわけで、わが家来六人と妹を連れて、小陸人くされ陸人の里に山狩りに上陸したところ、かくかくしかじかでわれらは小陸人に追いつめられ、今はもう勇士の血を引く族長家系のわれも斬られてしまいそんな有様。進退窮まり汝の懐に逃げ込んだのであります。さあ！村をあげて助太刀してください」と言ったところ、何と早く聞き分けてくれたものか。頂上平らな険しい崖山の頂きから、青年の若々しい声がこう響くには、

「何といまいましいことが聞こえたものか。どんな生まれと育ちをした者が小陸人くされ陸人なのか、あいつだけが度胸も風貌も優れているとて、あたりの国々に評判なことだけでも腹立たしかったのに、その上さらにあちこちの海を超えて、われら沖人を皆殺ししまくっていると言うのか。アトウイヤウン

クルもわれと同じように思っていたとは。お可哀想に、類まれなる勇者が窮地に立っているとおっしゃるのだな。まことお気の毒だから、われらも助太刀して妹御やご家来衆と一緒に、小陸人くされ陸人をぶっ殺してやろうぞ」

と承諾の返事を寄こしたから、アトウイヤウンペは大喜びで妹と一緒に跳びはねている。

ポンチュプカウンクルは声高々に「こういうわけだから戦さの準備をせよ」と下知した。村じゅう大騒ぎになり、村のかみてから村のしもてまで武具の摩擦する音が高まり起こってきた。

しばらくすると、どこの者を討とうとするのか、虫が湧きかえるさながらの大群が出現した。

たった一人のわれだけならどのようにされてもいいが、まだ幼い妹は独りで留守番することをあんなに嫌がっていたのに、もうずいぶん長い間われが帰らないから、心配のあまり泣いて泣いて泣き死にしているかもしれない。しかし少しでもわれが心配する気配を見せたならば、アトウイヤの奴らに嘲笑されかねない。

幾重にも重なる部隊のすぐそばにわれは走り寄る。今初めてわれは戦争というものを知った。大勢の者がわが刀の前でズバズバと音を立てる。

軍勢の背後でアトウイヤウンペと妹が先勝祈願の踏舞をしている。その傍に何者かが降り立った。その靄の中心をわが眼力で散らし見れば、話に聞いていたポンチュプカウンクルが妹と一緒に武装していた。男の方はアトウイヤウンペと同じ年頃で、新月と満月の模様がついている上着と襟や裾まわりに幅広の平金が巡らされている金糸銀糸の豪華な衣装を着こんで、尾錠付き帯を胴に巻き、神授の太刀を腰に下げ、兜の下げ緒をきりりと締めていた。女の方はいくら褒めても褒めたりないほど美しい娘で、アトウイヤの奴らと挨拶儀礼を交わし撫で合っている。

ポンチュプカウンペは手庇を目の上高く低くかざして、軍勢を越えたこちら側にいるわれの靄の中心を、腰をかがめたり爪先立ったりしながら、見ようとしたが、濃い靄と発する光のせいでよく見えないらしい。

それからこの戦さは持久戦となって行った。わが憑き神たちが、たくさんの堅い音をわが頭上に響かせ、いくつもの竜巻が戦闘の上におおいかぶさる。時に

は風先から大粒の霰大粒の雨が降ってくる。軽い鎧の大群が神風の先に吹き上げられ、折りかえし大海原に落ちていく。泳げない者は石みたいに沈んでいき、泳げる者は海面にしゃもじが並んだみたいに頭だけ浮かべて口々に怒号をわめき散らす。

「<sup>ボンヤウンベ</sup>ト <sup>イ</sup>ヤウンベ、普通の人間といわれているのにその憑き神の何というすさまじい戦いぶりか。今やもう、われらは尋常な死に方はできず苦痛に満ちた悶死することになるんだろうなあ」

と不平がましく言い合っては、波間に頭を浮き沈みさせ海水にむせている。われが太刀で斬り殺した者など物の数ではない。わが憑き神の働きで海や山に落ちて死んだ者折れた木で死んだ者たちの身から離れた生き霊が死んで行く音が絶えまなく続く。

そうやってやって、犬一匹も残さず、いや犬にたかる虫けらさえもわれは殺し尽した。総大将であるアトウイヤウンペ兄妹とポンチュプカウンペ兄妹は天空上に飛び上がった。

前と同様、われはまたどこかに追って行かされる。再び奴らが逃げて行く道の行く手行く手へわれは先回りし、とうとうこの<sup>アラカミアン</sup>大怪物たちにふり返る間も身を交わす間も無く追いつめた。

## 第2節 ポンモシリ村

われが走って行くと、やがて何という郷なのだろうか。少人数の村の屋根屋根が眼前に高々とせりあがってきた。

再びアトウイヤウンクルが叫んだ。

「申し上げます。ポンモシリウンクルよ。かくかくしかじかで「<sup>ボンヤウンベ</sup>小陸人が汝の元まで追いかけて来たぞ。村人たちと一緒に助けに来てくれたまえ」

と言ったところ、そやつはポンチュプカの奴と同じように承諾の返事をして村中に<sup>げじ</sup>下知した。再び戦いの準備が整い、最初みたいに虫がわきかえるさながらの大群が出現した。

本当にまあアトウイヤウンペはどこまでも童に等しい男子にすぎないわれを殺したいが故に、いくつもの戦さを勃発させ、いくつもの村に救援を頼むようだから、われは猛烈に腹が立つ一方で気分が高揚もしてくる。

軍勢の背後に空からサッと降りて来たものを見たら、話に聞いたポンモシリウンペ、靄や光のせいで姿が見にくいけれども、アトウイヤウンペと同年齢

らしく、また服装も佩刀も素晴らしい。女性の方もアトウイヤウンマツやポンチュプカウンマツと同様非の打ち所がない美貌だ。奴らはまた挨拶儀礼を交わし合い、札を言い合っている。ポンモシリウンペも<sup>てびさし</sup>手庇を目の上に高く低くかざし、軍勢を超えたこちら側にいるわれを、腰をかがめたり<sup>つまさき</sup>爪先立ったりしながら、わが靄を散らし見ようとするが、見る事ができない。見られたらいっそう腹が立つ。そこでもっと濃い靄でわが身を包んだ。アトウイヤウンマツ、ポンチュプカウンマツやポンモシリウンマツもじっくりわれを見たいものだから、兄たち同様にしたものによく見えなかったらしい。

再び大勢の者がわが刀の前でズバズバと音を立てる。妹を思い出すと泣きたいような気持ちになってしまう。この戦さで雑兵どもを殺し尽くしても、敵はまた別の村に救援を頼みに行く。なんとかして果てしなく続く戦さを終わらせて妹に会いたい。また、どうしたらあのアトウイヤの奴に仕返しできるかなどとかんがえながら、われは軍勢に襲いかかって痛罵を浴びせる。最初の戦いなど物の数ではない。われが力いっぱい跳び上がると、それと同時にわが憑き神が数々の轟音をわが頭上に響かせる。尻尾がついたような竜巻が戦闘の上におおいかぶさり、大勢の者を枯葉のように吹き飛ばす。まるで青草を刈り、柔らかいものでも打ち散らすように大勢がわが刀の前でズバズバと音を立てる。

この戦さは追撃戦となり、われは怒濤のように押し進む。やがて雑兵どもを殺し尽くして戦さが終ると空がぱっと晴れた。

いつものとおり総大将たちが天空に逃げていった。連中が他の村に着かないうちに何とか叩き斬ってやりたいから、逃げる道の先々にわれは立ち回る。そうしたものの、一人も刀先に触れる気配もない。斬り合うことも無く殺し合うことも無くわれらは追いかけて合った。

## 第3節 リクンナイ村

どこに向かってなのか、行きに行くと、大きな村の屋根屋根が眼前に高々とせり上がって来た。村の中央には盛り上がる孤峰が天空にそびえ立っていて、頂上平らなけわしい崖上に館と柵構えが立っているようだ。

アトウイヤの奴が弱い叫び強い叫びを入り混ぜて

呼びかけた。

「これこれ、リクンナイウンクル、神のごとき勇者よ。よく聞いてくだされ。汝も聞いておろうがかくかくしかじかで小陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>がわれを困らせ、せっぱ詰まったわれはポンチュプカまでわざと追わせた。ポンチュプカびとはわれを憐れみ加勢してくれたが、小陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>くされ陸人<sup>イ ヤウンベ</sup>はポンチュプカ村人全員を殺し尽くし、村も荒廃させられた。

進退窮まったわれは、ポンモシリびとに加勢を頼んだところ、喜んで加勢してくれたが結局ポンモシリ村は皆殺しにされ、村の跡形もなくされた。今はもう、つまらぬわが体も消されてしまいそうなので、汝の元へ小陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>を追いかけさせたのであります。いかかかな、神のごとき勇者よ、われを憐れんで妹御や村人と一緒に救援に駆けつけてくださらぬか。もはや汝しか小陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>退治をわれが任せられる勇士はいない。われらではとてもかなわないのであります」と言ったところ、どこかでじっと注意深く聞き入っていたらしく、山頂から響く若者の声がこうあるには、

「われにしても幼い頃から聞くともなしに聞いていたが、どんな生まれの小陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>くされ陸人<sup>イ ヤウンベ</sup>なのか、あいつだけが度胸よく、あいつだけが首領であるとして、たくさんの国々をこえて噂されていた。さらにまた沖<sup>レブンクル</sup>の島人とて自ら望んで死ぬことを思いはしないのに、国々を巡りわれら沖人<sup>おきびと</sup>を皆殺しにしているという噂を聞くと、冷や水が肌にかかるがごとくぞっとした。一人前の男になったあかつきには勇者同士で一騎打ち<sup>ウ タサ</sup>の決闘をしようと決意していたが、いいあんばいに小陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>を連れてきたとは大変嬉しい。承知した。妹や村人と一緒に助太刀いたしましょうぞ」と言い、一刻も早く戦いの準備をせよと大声で命令した。いつものとおり村じゅう大騒ぎになり、やがて誰を討とうとするのか、虫がわきかえるさながらに大軍が出現した。最初の戦いなど物の数ではない。胆力ある勇者や族長ばかりの部隊が幾列にも並ぶ。さすがのわれも心細くなった。大勢の者がわれを殺したいと言うのだから、今はじめて情けない気持ちになり、泣き死にしそうなほどつらく感じた。前の村々以上の勇者ぞろいの村らしい。

そのうち険しい岩山の頂きに爆発音がして、何者かの到来する音がゴロゴロと鳴り轟く。軍勢の背後

に空からサッと降り立った者を見たら、薄くかける丸い小さな靄の塊が近寄ってくる。靄を何度散らしても人間の姿にして見るができない。ようやくわが目の先がさっと届いた。アトゥイヤの奴ポンチュプカの奴ポンモシリの奴が美男だとわれが言ったが、何者だからとてその様なのだろう。まだ若いわれより一年ほど年上らしい者で、金襴の衣装を襲ね着し、尾錠付き帯を胴に巻き、腰に下げた神授の太刀で脇の下がきらびやかだ。兜の縁から見える顔はさし昇る太陽のように目映<sup>まばゆ</sup>くわれに照り返す。どこに刀を突き刺せる箇所があるのだろうか。背に沿って胸に沿って金属で蔽われ、前胸は紐で閉じられている。勇者にちががなく勇者の相貌で顔つきが強そうだ。神なのか人なのか。これほどのひとが理由も無くわれを殺したいと言うのだ。こんな美しい者をわれが斬るのはもったいないように思える。奴も手<sup>て</sup>庇<sup>びきし</sup>をかざして、軍勢の向こうから腰をかがめたり爪<sup>つまさき</sup>先立ったりしながら、長いことかかって靄の中にいるわが半顔を目撃したとたん、顔が死人のように青ざめ、これほどの方がまるで高貴な人を目撃したみたいに目を伏せつつも、眼の隅からわれを観察した。われに感心していることはわかったが、不思議そうに、

「おや、意外だな。小さい陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>と言うから、もっと大人が大げさに噂されていたのかと思っていたのに、何としたことか、赤ん坊みみたいなまだおんぶ出来る小童<sup>こわっば</sup>、絶対われより劣っているような奴が、本当にポンチュプカ村やポンモシリ村の住人を皆殺しにし、村じゅうをひっくり返したのか。超優れた勇者や族長ばかりがたくさんいたのに、たった一人の餓鬼に負けてリクンナイ村まで追いかけさせて来たと言うのか」

と言って自分の鼻や口の前に拳をあて、たまげて発する裏声が聞こえてきた。

それから笑い声が響いてこうあるには、

「これこれ、小陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>よ。よく聞きなされ。何度も何度もわれらが言ったように、汝がどんな勇者や首領であっても、沖<sup>レブンクル</sup>の島人とて自ら望んで死にたくないのに、理由も無くわれら沖人<sup>おきびと</sup>を皆殺しにして回っていることを、これまでの生涯どんなにか腹を立て、汝にタイする氣勢をあげながら暮らしていたのだが、いいあんばいにわが手元にやって来たようだ。今度

の戦いはたやすくはないぞ。リクンナイ村は胆力ある勇者ばかり族長ばかりが霧がたちこめるようにいっばい居る。汝が生き抜いた時に、立ち合いや肝つ玉くらべをして、もしお前がわれに全敗したら、生涯の間生き恥をかかしてやるぞ。さあ、わが護り神の音を強めるよう汝が氣勢の力声をあげろ」

と言うから、われはわざと大笑いして両手をうち叩き、声音を響かせて言ったことはこうである。

「これこれ、リクンナイウンベよ、わが言うことをよく聞け。それに相応しくあるものこそ首領であり勇者のはずなのに、どこに目や耳がついてそのように言うのか。まだ赤ん坊みたいな、まだ遊戯さえよく知らないわれが、どこにまあ、あちこちの海を超えて汝の同胞をいかなる理由に基づいて斬り殺すというのか？汝はこの戦いの原因も知らずにわれを殺したがっているのか。もったいなくも勇士である族長が、身分ある男子に相応しい神の心を持って、あのように立派なリクンナイ村の上流から下流まで統治することこそ汝にふさわしいのに、自ら望んで汝がどこまでも理由も無く戦争をするというのなら、いくさの終りに樹下で一对一で立ち合う決闘をすべく、しっかり気合いをいれてやろうぞ」

#### 第4節 リクンナイの女

言うと同時に山頂でバンと音がした。

「これはこれはアトゥイヤウンクルよ。意気地なしの弱虫が、生意気千万にも一人前の男である勇者の族長であると名乗りをあげながら、恥ずかしげもなく参戦を頼みまわっているのか？戦争をするならひとつの村だけですればいいのに、いかなる理由で大昔からわれらが平和に治めていたリクンナイ村の村内まで、トミサムベチ・シヌタプカの幼な神に追いかけてきたのだ。

おおあわれ、父祖代々住んで来た故郷の村は、意気地なしの馬鹿者アトゥイヤウンベのけしからん行動のせいで、今はもうシヌタプカの幼な神たぐいまれなる勇者に皆殺しにされて村も荒らされ消滅することが、妾にははっきりわかるのだ。

その上、わがくそ兄者のあんちくしょうが、無縁の他人つまらぬアトゥイヤウンペの悪党にそそのかされ、愚かにも先祖の遺言に背き、戦さ動機が正しくない側につくのか。

半神半人である父上が、幼い頃からわれらに教え

たのは、『トミサムベチ・シヌタプカの神のごとき勇者たちは、大昔から神界や人間界で評判の方々だったが、遠在近在の者たちがその高名を妬み、連合軍を組んで敵対したから、長い間あちこちの海を渡って戦いばかりのつらい歳月を送ってきたそうだ。われらはいわれの正しくないものに味方して戦ってはならぬ。わが子たちよ、お前たちが大きくなったとき、シヌタプカの子孫が、また以前の戦争を遙かに超える大戦さをするにちがいない。われら夫婦が神の国へ帰ったあとも、神のような方々の戦さがリクンナイ村を通過するときには、絶対参戦してはならないぞ。人の上に立つ首領というものは相手の言葉をよく聞くものだ。わしの言いつけをしっかりと守るのだよ』と。

妾は父上の教えを忘れずリクンナイ村を大切に守ってきたのに、たとえアトゥイヤの奴が元凶だったとしても、わがくそ兄者は奴と同じはんかくさい（思慮が足りない）精神でこういうことを言うのか。

あの幼な神が、見事に筋の通った話をしたのに、兄者は恥ずかしげもなく、たった一人の男子を殺したために、リクンナイの村人全員を戦争へ巻き込もうとしているのか。

兄者に味方して妾が独りだけ生き残ったとしても、女が木幣や御神酒をつくって神や先祖を祀ったり、リクンナイ村の上流から下流まで治めることはできないのだから、やむをえず幼な神に味方して、自分の同族を斬る。人殺しの末裔沖の島人である妾であるから、戦さの終盤に幼な神が佩く太刀で斬り殺されたならば、それを死後のよい形見として妾に相応しい死に方にするつもりぞ。覚えておけ」

と、ひどく若い小娘の声つきが神の声のように美しく響いた。そのとたん山頂上に爆発音がして神が到来する音がゴロゴロと鳴り轟く。旋風が吹いてきたと同時に何者かがわがそばにサッと降りて来た。

見ればさして大きくない丸い靄の塊が近寄ってくる。濃い靄の真ん中を見ようと何度も試みているうちに靄の中心にわが目の先がさっと届いた。

まだ少女のような若い娘で、大事に育てられた者らしく、筒状の金欄の着物に絹帯を巻き、りっぱな玉飾りと耳輪をつけている。

優れた巫女にちががなく、霊力を自分の冠り物のなかに隠して、口のまわりの入墨が明るく輝いてい

た。片方の肩から半輪の虹、片方の肩から日光の虹が射して頭上で交差している。髪の毛の下には神々しい顔が真昼の太陽のようにまばゆく照り輝く。美しい髪の毛が絹糸のように頭上におおいかぶさっていて、その髪の毛のさきには光がつきまどっている。

強い憑き神の持ち主にちがいなく、目に見える憑き物は蝙蝠の群れのように背後に交差し合い、目に見えない憑き物は星の光のように背後に光っていた。

濃い靄ときらめく光のせいでよく姿が見えないものの、リクンナイウンベと目付きも眉付きもそっくり同じだ。兄妹揃ってたいへんな美形だ。

もじもじ遠慮して袖山を噛み噛み、お返しにわれの靄を散らし見る。ようやくわれの半顔だけ目撃したものの、これほど神のようなひとが何か偉い神を見たかのように、顔色を変えた。大いに感嘆しながら隅々までわれを観察してから、われを直視せず目を伏せている。

手遅れになったらいけない。まだ少女のような彼女をつかまえ、ちょっと後ろの乾いた草の上に腰をおろした。われは若い娘を撫でさすり、

「おお、何ということだ。リクンナイウンマツよ。まことなのか。かたじけない。何度でも言ってください。われは聞きたいから」

と言えば、若い娘はほっとして本心だと誓った。リクンナイウンベやアトウイヤウンベに見せつけるために、われはわざと娘を両腕に抱えて、「他族の女性よ、大切な人よ」と言って頭を撫でさすり、神々しい顔に何度も接吻した。その上で

「これこれ、沖の島人の淑女よ、よく聞きなされ。どのような生まれと育ちのわれなのか、遠在近在の者たちはわれを憎み、殺したがっている。われは少しも戦さをしたくないのだが、人々に罵倒されるのがまことに情けない。もはや身よりも無く親戚もないわれであるから、戦いの間ひとり淋しく腹を立ててばかりいたのであったが、女性であっても聡明なそなたは、神のように気高い淑女精神の持ち主ゆえに、理不尽に仕掛けられた戦さを拒否して、われに味方したいと言う。そのことを心底感謝し喜んでいる。そなたが真心から言ったのであれば、これからはそなたの加護を戦力にして、われは全力で奮戦するつもりぞ」

とわれは言った。

彼女はとても喜び安堵して「兄さま」と絶叫し、わが衣の両裾端をかき寄せてから膝がしらから腕にかけて何度もさする女礼をした。

こうしてそばで見ると彼女は人間の女なのであろうか、まるっきり祀られて天に還る神のようだ。われは前にアトウイヤウンマツ、ポンチュプカウンマツ、ポンモシリウンマツを美しいと言ったが、リクンナイウンマツの足許にもおよばない。

今年初めて肌衣の胸紐を首もとまで締めたらしく初々しい。われらがお互いに称讃の眼で見つめ合い喜び合っていた。

## 第5節 悪口合戦

リクンナイの奴は話を聞いて一日じゅうグラグラと国土が揺れるほど驚いた。息を殺して、軍勢の向こうから爪先立ったり腰をかがめたりしながらわれらの様子を見ていたが、下顎をしゃくり上げてそっぽを向き、激しい怒号をわれらに浴びせかけた。

「アチカラタ、アヤカンナタ(ああ嫌だ嫌だ)! わが不肖の妹のちくしょうめ。別な城で神食を食べさせるほど可愛がって育てたのに、これからは無縁の他人小陸人くされ陸人に味方して戦うと言うのか? いつのまにか一人前の女になりやがって、われでさえまだ操を守り自分を律して堪えていたのに、まさか小陸人の淫魔姿に惚れくさって、奴といちゃつきたいためなのか? わが悪妹は女であっても強い憑き神の持ち主だから、男子の勇者でもかなわない。これまでの戦さも妹のおかげでわれは切り抜けたが、今は性の期待に浮かれている。

何かを畏れはばかるのがこの人間というものなのに、小童小娘が羞恥心もなく衆目の前で何をいちゃついているのか。生意気にも共寝とやらを知っているのか、われらを馬鹿にしているのか。好きなようにやれ。戦さの最後には必ず死罪にしてやるから覚えておけ」と悪口雑言をぶちまけた。いい気味だ。

アトウイヤウンベにも大衆の眼前で恥をかかせてやったから、奴は顔色を変えて、

「好きなように言うなら言え。小陸人たった一人がいくら頑張っても、神のごとき勇者リクンナイびとにはかなわないだろう。とするならば、いつ小陸人はそなたを妻にできるのかなあ。さあ! そなたの兄に味方しなさい」

と言ったところ、リクンナイウンマツはペツと唾を吐きながら、

「アチカラタ、アヤカンナタ！アトウイヤウンペズるがしこい愚か者め。こしゃくにも何ということをするものだな。死にたくてそのように振る舞うのか。お前の方にこそ<sup>わらわ</sup>妾が死罪を与えるだろう。これなる戦いのそもそもの発端をお前が作ったのに、お前のような悪漢はんかくさい男は何も言わずに<sup>かしこ</sup>畏まってなさい」

と言い返した。兄のリクンナイびとはもはや説得するのを断念し、あいかわずそっぽを向いている。

われら二人は肩をならべて敵の大軍に駆けよった。リクンナイウンマツは懐にしをばせた懐剣をさっと引き抜く。顔の脇がキラリキラリ閃く。アトウイヤウンマツはあんなにも美しかったのに、激しい怒りを燃やしてこんな怒号を投げてよこした。

「ああ嫌だ、<sup>けが</sup>汚らわしい。リクンナイのくされ女馬鹿女だけが淑女なものか。全くえらぶってしゃべりまくり二度も三度も兄上様に恥をかかせたわね。淫乱な者だってもっと淑女らしい上品な物言いをするものよ。わたくしたちの方こそ淑女らしい話し方だわ。<sup>ボンヤウンベ</sup>小陸人よ、どうかしら、水汲みなり薪とりにもわたくしたちを使ってくださいましな」

と言ったら、リクンナイウンマツのうち笑う声が響く。片手の小指を上下へ動かし、

「ほお、何をおっしゃいますやら。何度でもお言いなさい。<sup>わらわ</sup>妾が聞いてあげるわ。わが手や足の小指にも及ばない者が<sup>こしゃく</sup>小癩なことを言ってくれるわね。アトウイヤ兄妹が戦さの原因をつくったおかげで、<sup>わらわ</sup>妾も自分の村人を斬り殺すはめになった。何を言っても<sup>うっざん</sup>鬱憤は晴れない。神のごときお方と<sup>わらわ</sup>妾が仲良く戦っていることがほんとに羨ましいでしょ。お可哀想に。そなたらのような者は外回りの下女としてさえもおぞましいわ。何も言わずに畏まっていなさい。<sup>ボンラン</sup>幼な<sup>カムイ</sup>神神の御子は、リクンナイウンマツ至高の巫女と連れ添ってこそほんとうに似合いの夫婦になるのです。どんなに羨ましがっても無駄よ。もう黙って<sup>おとな</sup>温和しくしていなさいな」

アトウイヤウンマツは大いに腹を立てた。

「オヨヨポタ、オヨヨポタ(ああ忌々しい)!どのようにもお言い。戦いの締めくくりに空中で巫女戦をやって、もしそなたがわたくしに完敗したら、一生

涯生き恥をかかしてやるわよ」

ボンモシリウンマツやポンチュプカウンマツは悲憤慷慨してアトウイヤウンマツに加勢した。全員が片手の指を上下に動かしてリクンナイウンマツと口喧嘩する。

いつものとおりわが憑き神たちが、頭上にたくさんの堅い音を響かせる。われが通った所の軍勢はとり散らされた敷物のようにばたばたと打ち倒れた。尻尾がついた竜巻が戦闘に<sup>おお</sup>覆いかぶさり、竜巻の先から大粒の霰や雨が降ってくる。海辺ではひどい砂嵐が吹雪のつむじ風となって空に吹きあがり、まっ黒な雲となって戦場に覆いかぶさった。砂まみれになった者たちがペッペツと唾と悪口雑言を吐き散らす。

いきなり力いっぱいわれが空中に跳びあがると、それと同時に鎧の軽いものは神風の先に枯葉のように空中にクルクルと舞い上がり、折るかえし大海原や遠い山々近い山々に落ちていった。海や山に落ちて死ぬ者、折れた木に突き刺さって死ぬ者の身から離れた霊が死ぬ音が絶えまなく続き、国土の底に鳴り轟く。

リクンナイびとは自分の鼻や口の前に拳をあて、

「<sup>ボンヤウンベ</sup>小陸人の憑き神の働き振りはおそろしや恐ろしや！どうやらわれに匹敵する胆力の持ち主であるようだ。戦さの終りに勇者同士で立ち合い互いの<sup>ウタサロシキ</sup>肝っ玉くらべをして見たいなあ」  
と驚いている声が聞こえてきた。

リクンナイウンマツが軍勢を跨いで戦うときは刀影のみピカピカ閃いて見えるだけ。人々の股の下に潜り込むと、皆は彼女を何度も取り逃がし、逃がした者同士で突き合い斬り合う。ある時はわが<sup>かたわ</sup>傍らで刀をふるい、あること無いこと口まかせに冗談口をたたいた。なんとまあ気晴らしになったことであろうか。軍勢の氣勢をあびながらわれらは爆笑した。

軍勢の背後にいる三人悪女は激怒して、

「ああいやらしい、けがらわしい！色狂いの奴ら二人は戦いの最中に何ということをしているのか。お互いにいい振りこいて花嫁花婿の初顔合わせしているのだ。どのようにでも好きなように振舞え。今に見てろ」

と言っている。

「リクンナイの女この淑女にとって恐ろしいものは

この国土には誰もいないのだ。わが手足の小指にも及ばないくだらない愚か者たちは、羞じ入って畏れ謹んでいなさい。幼<sup>オリ</sup>な神<sup>バク</sup>の勇者<sup>して</sup>こそ妾<sup>ボシラン</sup>が結婚<sup>カムイ</sup>したい似合いの器量のお方なのよ。黙って妾<sup>わらわ</sup>がよき運命にしてあげるまで待っていなさいな」

すると三悪女たちは、地団駄を踏みながら悪態をつく。

「オヨヨ、オヨヨ！それに相応しくあるものこそ淑女であり娘であるはずなのに、リクンナイの女だけが淑女か。あの女ばかりが刺繍の名手か。あいつだけが巫術<sup>まじゆつ</sup>の達人か。あまりにも自惚<sup>うぬぼ</sup>れ淑女<sup>カクゲマツ</sup>ぶって、どこまでもわれらを軽蔑してしゃべりくさっているなあ。われらこそ淑女であり巫女であり刺繍の名手なのに」

それを聞いてわれら二人で大笑いした。

#### 第6節 兄妹対立

リクンナイびと呆れかえって

「本当にまあ、わが悪妹振る舞いは、色<sup>オチウ</sup>に狂い愛慾<sup>キニン</sup>の虜<sup>とりこ</sup>になった化け物に憑<sup>シン</sup>かされている者そのものだ。さあさあ、アトウイヤのポンチュプカのポンモシリ<sup>シンナイサム</sup>の女性たちよ。今あいつに言われたことを決して忘れず、その憤り<sup>てちから</sup>と手力にして、戦いの末に死罪を与えてやりなさい。強い憑<sup>シン</sup>き神を持つ妹がわれに味方してくれたら、小陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>をとっくに成敗してあいつを嗤<sup>わらわ</sup>ってやれるのに」

リクンナイウンマツはバンと音をたて、

「おお、くそ兄<sup>あにじや</sup>者はよくもそんなことを恥<sup>あにじや</sup>ずかしくもなく言えるわね。兄<sup>あにじや</sup>者が神意にもとる悪行<sup>あくぎよう</sup>を行い、馬鹿者<sup>ハイタク</sup>になり下がって、父祖代々住んで来た平和な村に戦いを引き起こしたのです。愚<sup>ハイタク</sup>か者アトウイヤウンペがどのように振る舞っても、雄弁<sup>バウエトク</sup>な兄<sup>あにじや</sup>者のことだから先祖伝来の家訓を守っていたのであれば、妾<sup>わらわ</sup>はこのように気をもませやしなかったでしょうに。

たった一人の童みたいな男子を理由も無く殺したがるのが神から非難されることだとは思わなかったのですか？」

と言い負かすと、リクンナイウンペの顔面が急に土気色に変わった。

『なるほどそうだ』とわれは思った。ざまあ見ろ！好い気味だ！彼女の言葉だけでも大いに鬱憤が晴れた。

おおあわれな。どのような生まれのわれなのか、妹と二人っきりで暮らしていた。その後アトウイヤウンペの挑発のせいで、いくつかの村々を引き回され、このような剛勇の村まで追いかけさせられ、いささか心細くなっていたところに、天佑<sup>てんゆう</sup>によってリクンナイウンマツが加勢してくれた。その戦力靈力は、兄リクンナイの奴が道理で惜しがったわけだ。われもそれを戦<sup>トクミ</sup>力<sup>モントウム</sup>とし、やがて合戦は一箇所停滞する拮抗戦に突入して行った。

### 第4章 棍棒撃ちと巫女戦

#### 第1節 雑兵

夜ともなれば、鼻歌の歌節をのどの奥で面白くくねらせた節まわしをわが口元に美しく響かせた。大勢の者が「さあさあ、小陸人<sup>ボンヤウンベ</sup>の軍勢は少くないらしいぞ。早くぶった斬<sup>ミ</sup>ってしまえ、突き殺してしまえ」と氣勢をあげおめき叫んで、同士討ちする音ブスリベチャリ。いっせいに生き霊が死ぬ音絶えまなく続く。われはそれで鬱憤も晴れた。ひそかに冷笑した。

夜が明けるとわれは大笑して、

「われが一人では斬<sup>ミ</sup>りきれないからとて、どうして仲間同士で斬<sup>ミ</sup>り合い殺し合っているんだい？」

と言えば、皆驚いて目を瞠<sup>みは</sup>った。やっぱりわれらが二人で戦っているのを見て、いっそう腹を立て、人のせいにして罵<sup>ののし</sup>りあう声<sup>やかま</sup>が喧しい。それでも毎晩同じ事をわれは言った。

あんなにも斬<sup>ミ</sup>ったのに、殺しても殺しても、あとからあとからどんどん敵が増えてくる。何かで疲れるものが人間なのに、密かに窺<sup>のぞ</sup>って見ると、リクンナイウンマツはまったく疲れる様子もなく次第に強くなっていく。いつものように刀をふるい、人々の股の下に潜り込む。取り逃がした者は同士討ち。これが一番小気味がいい。

リクンナイウンマツは時々わがそばに駆けつけた。われは二度三度と振り向き、首から上が見えなくなるほど何度も深く<sup>うなず</sup>頷く。そうすれば、大喜びの笑い声を響かせた。

リクンナイの奴はそれ見るだけでも腹が立つから、下顎をしゃくりあげてそっぽを向き、大声で「さあさあ、淫欲に夢中で気が狂っている奴らをとっとと斬<sup>ミ</sup>ってしまえ。殺してしまえ」と命令を下す。

槍を持つ組は尖鋭な一団となって、太刀を持つ一

団ババラバラと木の葉が舞うように、氣勢をあげながら突進して来た。その軍勢を槍もろともたたっ斬り、槍もろとも折りしだき、太刀もろともにぶった斬る。

もはや雑兵どもがわずかに残っているばかりだ。いつしか追撃戦となって斬りまくり、とうとう犬や虫けらの果てまで生きとし生けるものすべてわれは殺し尽した。戦さが終って空がぱっと晴れた。

いつものとおり総大将たちが天空に飛びあがる。すぐ後にわれも続いてあとを追い、逃げる道の先々われはたちまわる。

氣勢の声を挙げながらそうしているうちにポンチュプカウンペが汁の実をかつ散らかしたようにわが両腕の間にくだけ散り、その靈魂が天に還って行く音がゴロゴロと鳴り轟く。

リクンナイウンペのうち笑う声が高く響いた。「おや、これはこれは！ポンチュプカウクルよ。勇者か首領かであると思っていたのに、ただひとつ走りただけで、まだ背負われるほどの小童こわっばから斬ってもらってこのざまか？」と吐き捨てるように舌打ちした。

女連中が別に追いかけるゴロゴロと鳴り轟く。今こそ初めて斬り合うこともなく殺し合うこともなく空中にガラガラゴロゴロ国土の底まで鳴り轟く。

## 第2節 棍棒づくり

リクンナイウンペが川端かわらの木原の上に降って来て言ったことには、

「これこれ、小陸人ボンヤウンペよ。いつまでも追いかけていただけいても、絶対斬り合いも殺し合いもできないから、勇者や首領というものとはただ一つの戦いをするものではありませんぞ。さあさあ！撃ち合いの闘いをしようぞ」

と言うから、われはオウこたと応えて、木原クナシに降りた。川端の木原にわれは走って行き、太いやちダモの枝を切り落とした。長い枝は長いなりに短い枝は短いなりに切り落とし、握りやすいように下端を削ってこしらえて、幼子を背負うみたいに軽々と棍棒を肩にかついだ。

「このようなもので勇者が撃ちウカ合カラいをする」と知っているのだ」

とわれが言ったら、リクンナイウンペは

「そうだな。われもそう思っていたところだ」

と言った。ポンモシリやアトウイヤの奴はヤチダモの大木を見て渋い顔をしている。

われは真っ先に大木に寄りかかって

「さあさあ、どなたさまでも早くわれを撃ちたまえ。弱くではない。われが気持ちよくなるほどに強烈にわれを撃ちたまえ」

と言えば、リクンナイウンペはあいもかわらず高笑いしている。アトウイヤやポンモシリの奴は腹を立てているものだから顔に血が上ってどす黒くなり、手の甲いっぱい静脈の太い筋が峰のように盛り上がって伸びていて、骨節をボキボキ鳴らせながら、最初に撃ちかかるべき者を競いあっている。

## 第3節 巫女戦(1)

そのうち、わが頭上で巫女同士の激しい戦さが起こった。いくつもの雲間を追いかける。ある時は息吹いぶきがっせん合戦フッサの息吹とやらの空から吹き下る音が棍棒シトクがあたったみたいにドンとして、息吹の先にポンモシリ女が降って来た。その手は翼になって生え出でてその脚は鳥の尾になって生え出でて、わがそばの地面にたたきつけられた。絹帯はちょちょ切れ、着ている着物を神風にめくりとられた丸裸のからだは遠くにストンと落ちた。肌の色は輝くばかりに真っ白で、隠すべき所も露わになっている。「アヤポ(あ、痛い)、オヨヨ(忌々しい)」と言って天空上に高く飛び上がったが、次の瞬間ちぎれた断片が左右へさっと散り、その靈魂が天に昇って行く音がゴロゴロと鳴り轟く。

急に三人男全員の顔が土気色になった。リクンナイウンマツの憑き神のしわざなのか。驚いた。

## 第4節 棍棒撃ち(1)

われは微動だにせずに、立木にぴったり張りついた。ポンモシリウンペは棍棒を大きく振りかぶって、二度も三度もわが背後で大股に跳ね歩くうち、渾身の力腕いっぱいの力をふりしぼって、今まさにわれを激しく撃とうとした。その瞬間、われは霧から飛鳥のように飛び出して、大木の陰にぴったり張りついた。あとにはわれが立っている形のままの霧が残っている。そうとは知らないポンモシリが空の霧を撃つ音がドスンとして奴は大木を激しく殴りつけた。われは大笑いし拍手しながらや擲ゆした。

「これはこれは！ポンモシリウクル類まれなる勇者よ。どこに目がついているんだい。われはほらこ

こにいる。立木の神がお気の毒に。何かを怒らせたからこんな痛い目にあったのかねえ」

今度はポンモシリウンペがこの大木に向かって立った。太い棍棒を軽々とわれは握り、大きく後ろに振りかぶって奴の背後を大股に何度も跳ね歩き、飛鳥のごとくパッと太い棍棒を振り下ろした。類まれなる勇者が振り向こうとしたとたん、われが撃ちつけた音手先にドスンとひびく。奴の胸にはこの棍棒が長短の止め串となって棘だち、止め串の先端には肉の塊りが突き刺さっている。奴は痛さのあまりに息もつけない。せつなげに息を吐き、もう虫の息だ。われはかっとなった。わが手元ピカリと光り、激しい太刀をわれ振りとはばす。ちぎれた断片が左右へさっと散り、ポンチュプカ女と二人そろって天に昇って行く靈魂の音がゴロゴロと鳴り轟く。

アトウイヤウンペの憤る声が割れるが如く響く。われは血が滴る棍棒手にして大木に寄り添うように向き合って立った。奴がわれの背後で大股に跳ね歩き、氣勢の声を挙げて棍棒を振り上げた時に、最初と同様われが靄から抜け出ると、奴は立木だけを撃ちつける。われは、大笑いして両手をうち叩き、

「おや、おや！アトウイヤウンペ真の勇士よ。どこに目がついているんだい。われはこのように温和おとなしく立っているのに。可哀想になあ、立木の神位の高い神が何か悪い行いをしたから乱暴に殴りつけているのかい？」

と当てこすった。奴は立っているのもフラフラで息も絶え絶えだ。

リクンナイウンペは倒木に腰掛けながら再び自分の鼻や口の前に拳をあて、

「本当にまあ小陸人は疲れを知らないのか。ますます元気になるようだ。早く勇者同士で一騎打ちウツダチの戦いシキをしたいなあ。それにしても、アトウイヤビとはなんと意気地なく弱々しいことか。さあ、ふんばれ。決して小陸人に打ち負かされるなよ」と檄げきを飛ばす。

## 第5節 巫女戦(2)

そのうちに、また息吹とやらが戦いの棍棒が打ちあたるごとく空から吹き降りてきた。息吹の先にまたポンモシリ女がポンチュプカ女と同様の姿で地面にたたきつけられた。その上にかすかな太刀影が降りて来る。絹帯は二、三枚に切り裂かれ、着物も破

られ、まっ裸のからだがムクという蔓草の根が転がるさながらにコロコロ転がる。真っ白な肌は隠すべき所も露わになった。リクンナイビとは直視しかねて、あっちを向いている。

ポンモシリ女はホーイと細くかん高い危急ペウツクシの叫びをあげ、泣きながら

「アチカラタ、アヤカンナタ！リクンナイのくされ女め！同じ沖レブンクの島人一族なのに、たとえ強い憑き神であったせよ、あたしの面目を失わせ、先祖から受け継いだ大事な肌を無惨にはだけ、男の目にさらしたのか。あんたがアトウイヤウンマツに負けたら、生涯の間生き恥をかかされるでしょうよ」

と言った。雲に乗っているリクンナイの女は、いつものように片手の指を上下へしなやかに動かし、カーッとつばを吐きながら

「さあ、見ていなさい。アトウイヤみたいな女の四十人や六十人、まとめて対戦しても妾わらわは少しもおそろしくないのよ。好い気味だわ！あんなにも妾わらわに罵声を浴びせたのに、女ぶりもよかった巫女がいいざまだこと。さあ、リクンナイの神のような淑女の憑き神の働き振りをとっくり見物して羨ましがりなさい」

と言ったなら、ポンモシリ女の影がふっと消え、ちぎれた断片が左右へさっと散る。

## 第6節 棍棒撃ち(2)

アトウイヤウンペが木に向かって立った。われは血が滴る枝付き棍棒を振りかぶって奴の背後を何度も何度も大股で跳び歩き、フムという気合いとともに激しく撃ちつけると、手先にドスンと手応えがあった。最初の撃ち合いなど物の数ではない。棍棒にした枝木が奴の胸に長短の止め串となって刺さり、串の先端には大きな肉小さな肉の塊がくっついていて、そのまわりはたくさんの血の川が流れ下る。

アトウイヤウンペは、苦にがくるしい咳をしながらハッハとあえぎ、息さえまともにつけない。

われの笑い声が高く響く。

「いかがかな、アトウイヤウンペよ。それだけ度胸がいい、それほどの首領が、何を痛がっているんだい。さあ、こわっぱ小陸人ボンヤウンペの憑き神の働きを見たくて、初めに汝から挑戦してきたのだから、今こそささやかなお返しをさせてもらおうぞ。今のはお遊びみたいなものだ。後々汝の魂が再生してこの世に甦っ

たならば、その時こそ、もうこりごりだと思っただの目に合わせてやるからな」

とわれは言って激しい太刀を振りとばす。汁の実をかつ散らかしたさながらに、またポンモシリ女とそろって死にゆく魂の天に昇って行く音が鳴り轟く。

### 第7節 棍棒撃ち(3)

ここに至り、リクンナイウンペがフムという氣勢を挙げてパッと立ち上がった。

まず先にわれが大木に向かって後ろ向きに立つ。奴は棍棒を振りかぶって、われの背後で<sup>ニウエン</sup>大股に跳び歩く。今まさにわれを激しく撃とうとした瞬間、最初と同様われは身体を包む霞から飛鳥のように飛び出した。

そうとは知らず奴は立木だけを力いっぱい叩き、フムとおめき叫んだ。次に奴が大木の前に立つ。その背後でわれがニウエンホリッパを<sup>とうぶ</sup>踏舞し、気合いととも棍棒を撃ちおろすと、かつてわれがしたことを奴も真似て霧から抜け出したから、われは空しく霧だけを撃つ。かわるがわる何十度何百回やってもけりがつかない。

そこでリクンナイウンペが、  
「<sup>ボンヤウンベ</sup>小陸人よ、いつまでやってもきりが無い。今から<sup>アラケ</sup>片手<sup>コシネ</sup>徒手<sup>アラケ</sup>片手<sup>バセ</sup>得物<sup>かる</sup>(片手<sup>おむ</sup>軽片手<sup>おも</sup>重)の戦いをしようぞ」

と言うから、われはフムと承諾の返事を返した。

### 第8節 巫女戦(3)

天空上ではリクンナイウンマツとアトウイヤウンマツがいくつもの雲間を追いかけ合い、空の涯までパタパタはためきの音が鳴っている。

アトウイヤの女が<sup>ツツサ</sup>息吹の先に降ってきて、地べたにたたきつけられる直前に天空高く飛び上がった。何十度何百回も繰り返した後で、いきなり地面にたたきつけられた。前のことなど物の数ではない。神風の先にクルクルとまわり、ひどい土ぼこりやひどい草の葉っぱが舞い上がる。絹帯は切り裂かれ、着物も<sup>は</sup>剥がれ、尻まる出しのからだ<sup>ムク</sup>が根みたくにコロコロ転がる。真っ白な肌は日光のように明るく輝いて、隠すべき所も露出している。ホーイと危急の叫びをふりしぼっているその上をかすかな太刀影が押しして行き、切断された身体が汁の実をひっくり返したみたいにバラバラ散る。くやしがる憑き神の死にゆく魂が音を鳴らして昇天して行く。驚いた

なあ。

リクンナイの女は天空でたくさんの靄男を身代わりにつくり、どこに行ったか行方がわからなくなった。

### 第9節 片手重片手軽

われは自分の帯をぐるぐるほどいて、薄もの一枚だけになった。先にリクンナイウンペがよしという声を発する。奴の身体をおおう金の隙間にうまく見当をつけて刀を突き刺した。下半身に脚を絡ませ敷物のように奴を引き敷く。舟材にする大木が倒れるみたいに奴は仰向けにどたっと倒れた。奴の下腹をひざで押さえこみ、左手であごをきつく掴んで、右手の刀で下から上へ上から下へとズブズブ斬り裂く。

そばで見ると、奴はまるで神のようだ。奴のほうも自分の上になっているわれに大いに感嘆したらしい。その美しい顔をわれは峰撃ちで殴ってから奴の胸を締めつけた。この<sup>アラカミアン</sup>大怪物は痛さに堪えかね、滑る氷のようにわが手からずりりと抜けた。

リクンナイウンペがわが胸を突く。初めて痛さというものを知った。泣き死にしそうなほど痛い。わが下半身を奴が脚で絡むと丸木舟を造る大木みたいにわれは大地に引き倒される。われがしたことをそっくり仕返しされた。

奴がわが顔を殴ろうとすると、われは首をさっと持ち上げ、あちらへこちらへと首を振り、奴はわがまわりの地面だけを空しく叩く。われはわざと大笑いしながら、

「おやおや！リクンナイウンペは目が見えなくなったのか。どうしてわれを撃たずに、かわいそうに何に腹を立てて地面をボカボカ殴っているのかな」とからかえば、奴はどうしたらいいかわからなくなってわれを殺すこともできない。

奴が下から上へ上から下へわれを斬り裂こうとすると、われは腰骨を上げたり下げたりひねったり、反らしたり。それと同時に身体を遠く近く揺らせば、わが首ぶらんぶらんと揺れる。奴はわが周りの地面ばかりを突き刺し叩き斬っている。われがニヤツと笑えば、いまいましく思った奴の顔色がどす黒くなる。

そのとたん、われは床の下敷きのように奴を引き敷く。奴もわれを真似、われは何度も奴を打ちそこな

う。何十回も何百回もわれらは無我夢中で下になり上になり組み合う。奴の着衣をわれが細かく引き裂けば、奴もわが衣をずたずたに引き裂く。われが奴を激しく撃ち据え彼がわれを激しく撃ち据え、われが奴を激しく突き刺し奴がわれを激しく突き刺す。痛いのはもういやだ。

今や、奴の内臓も外へこぼれ出て、わが臓物も外へこぼれ出る。地にこぼれ出た自分の大腸小腸を踏むまいとして奴はそれを跨ぎ、同時にこぼれ出たわが大小腸をわれ踏むまいとして足を揚げる。とうとうわれら二人とも臓物を縄たばの様にずるずるひきずっている。奴の細い背骨をわれ踏めば、わが細き背骨を奴が踏みつける。われが奴の骨を斬りのこせば奴がわれの骨を斬りのこす。おおあわれ。わが憑き神たちが鳴らす音は、時には音先が消え消えになり、時には死にそうなほど耐え難い音をわが頭上に響かせる。今はもう他所の国の憑き神は消え去ったらしい。わが憑き神と戦う音襲の絡み合う音はすべてあまりにも力が無さすぎる。

どれほどたった時に夢のようではあったが、奴の脊椎骨に刀をあて、腰や腕の力をふりしげれば、ちぎれた奴の断片が左右へさっと散ったと思ったら、返報の刀影がわれに向かって伸びてきた。

それっきり夢のようになってしまって、岸边に水流があけた真っ暗な穴の下へ突き落とされたみたいに、あとはどうなったかわからなくなってしまった。眠ったのか死んだのか、長い間なのか短い間なのか、われはうつらうつらしていた。

## 第10節 再生

誰やらの声何やらの音で目がさめようとしては、合間合間何度も夢心地になって気が遠くなってしまふ。そうやっているうちに人の声なのか神の声なのか、この歌が祭祀神が天に還る時のように美しく聞こえてきた。

何者かが腕にわれを抱いて、シュウシュウとわが身に息吹を吹きかけている。それとともに、わが身体に太い筋細い筋がぐんぐん伸びてきて、いくつもの肉片が後から前から寄り集まって来た。わが胸にも数々のひそやかな息吹が打ちつけ、と同時にわれを癒す薬効ある気となってわが心臓の隅々まで伸び伸びとしてきた。

しばらくすると、われはどこに傷手を負っていた

のであろうか。もとどおりの膚と衣服から武装まで前以上に美しく繕われていた。今こそわれは生きる命を取り戻した。

われは目を開けてリクンナイウンマツの顔を見上げると、恥ずかしくなった。若き童のわれは、うぶな肌身、隠している懐の奥まで露わにされて、若き乙女にいのちを助けてもらったおかげで生き返ったのだから、気持ちの半分ではもちろん感謝しているものの、その一方で情けない気持ちももたげてきている様子をリクンナイの女は見てとったから、慎み深く膝をついて進んできた。

われは彼女を抱きしめた。今こそ水入らずで挨拶できる。われはリクンナイの女の頭を撫でさすり、神々しい顔に何度も接吻する。その上でわれはこう言った。

「これこれ、リクンナイウンマツ、神のような若い淑女よ。あまりにもそなたに感謝し愛しいと思うから、これから『妹』<sup>トウレンボ</sup>と呼ばせていただきたい。そなたもこれからは『兄さん』<sup>ユツボ</sup>と呼んでください。

ああ可哀想に。何の事を言うのが性交<sup>オチウ</sup>なのか好色<sup>キニン</sup>なのか、戦いのさなかに敵からひどい侮辱を受けた。そなたが人殺しの血統<sup>レブンケル</sup>沖の島人一族であったとしても、われにひとかたならぬ憐れみをかけて味方してくれたおかげで長い戦さも切り抜けられた。一度殺されたのに、そなたの超度級の靈力で再びこの世に生き返ることができた。まことにかたじけない。若き男子<sup>おのこ</sup>のうら若い肌をお見せしたことはまことに恥ずかしいのですが、もうしかたありません。

たいした器量でもないわれではありますが、戦いの合間の休戦時に煮炊きをしてくださらぬか。その時たっぷりと愛しいたいのです」

すると、リクンナイの女は力が抜けてしまったようにわが腕の中に身を投げ出し、泣きながら、

「おや、これはこれは神のごとき勇者、わが愛し<sup>きみ</sup>の君よ。女のように気弱なお心をおかしく存じますわ。もう少し経てば、必ず肌を合わせ心を通わせられるのに、これが戦さのやりかたなのですから、あなた様がうら若い尊い肌身をわたくしに見せても、わたくしが<sup>あざけ</sup>嘲<sup>わら</sup>ったり嗤<sup>わら</sup>ったりするものですか。忙しく跳び回っている最中にそんなことを考える暇もない。わたくしも戦いの成り行きによっては、いつなんどき恥をかかされるかわかりませぬ。お互い様でござ

いますわ。わが愛しい神のようなお方よ。もうそれ以上自分を格好悪いと責めないでくださいませ。

もうわたくしたちは他人でなく、わたくしはあなたの定まった妻、かしづく妻なのですから、決してそのようにおっしゃらないで」

と言ったから、それもそうだとわれは思い直して、またもやリクンナイの女を抱きしめ、美しい顔に接吻し撫でさすった。彼女も「愛しいわが君よ」と言っただけで、われは衣の両裾端をかき寄せ、われの無事生還を慶ぶ。そのようにしながら、われらはしばらく休んだ。

さてそれから、われは愛しい娘をこう言って誘った。

「リクンナイウンマツよ、われの話をよく聞きなされ。われはたった一人なのではない。まだ赤ん坊みたいな妹に城の留守番をさせたまま、このように幾十の月日を費やしてしまった。わが妹は無人の家でずっと前に泣き死にしてしまったのではないか心配だ。幸いたった今いくさが収まったのだから、これからトミサムベチのシヌタプカへ帰ろう」

リクンナイの女は喜んで承知した。それからわれはわざといきなり天空に高く飛び上がった。彼女はすぐ後に続く。たくさんの雲間をわれらは滑りぬけ、走りぬけた。こんなにも早くわれが走っているのに、彼女は時にはわれを追い抜いたりする。疾走する神風先にわれらは軽々と持ち上げられた。多くの竜巻が行く先々にむらがる。

## 第5章 リクンナイ女の占い

### 第1節 はやる若者を押しとどめ

二人併走して帰国の途についたのに、一体どうしてリクンナイの女はそうしたのだろうか。鳥が円を描きながら舞い降りるさながらに川端の木原きむらの上に急降下した。若い娘は木原の上に座り、もじもじしながら涙を出さずに泣く。

「リクンナイウンマツわが愛しい妻よ。何ゆえにそなたは涙も出さずに気を揉んでいるのかな。隠さずに言ってくれ」

とわれが言っても、まだ言い渋っている。

「われの言葉をよく聞きなされ。いいことも悪いことも、われに言いにくいことは何一つ無いと思っていたのに、どうしたのか。わが館に帰ってゆっくり

休み、落ち着いてから若者がすることをしようと思っていたから、夫婦約束しただけで、まだ共寝していないのがもの足りなくて、そのような態度をとるのか？悪いことをしたなあ。

なるほど、今館に帰ってもチセタトウレン「妹」がいるので、しばらくの間は若者の行為をできないだろうから、今ここで青草を刈って寝床を造り、若者がする行為で少し遊んでから帰ることにしようぞ。早く寝床を造ってください」

と言葉を尽くしてなだめすかし、愛撫してもらえよう彼女の顔前へ顔をつき出した。若い娘は驚いて涙の間から目をあけわれを下からじっと見つめた。それから、チョッチョッと舌打ちをし、

「これはこれは！わがいとしの君よ。淑女の末裔であるわたくしを、随分ひどく侮辱したものですわね。性交オチウとか好色キニンとか敵に罵倒されたって、それが泣くほどのことですか。まるっきり見当違いですよ。あまりにもあなたがお気の毒なので、思わず泣いてしまったのです。今そのわけを全部言って聞かせますから、よく聞いてくださいませ。首領というものはどこまでも剛胆な気持ちを持つものでございますよ。悪い話を聞いたからとて、決して女のような弱気をだして、涙のひとつもお流しになりませんように。身内の味方がいなくなった者はどこまでも何人分もの働きをして奮起するのですよ」

と言うから、ますます不審を覚えた。われは今すぐここで寝ようと悪戯心で言ったのだが、至高の巫女が何やら聞かせる前に、このようにわれを激励するのはただごとではない。あれこれ考えていても仕方がない。大地に深く根をおろしている柱のように自らを落ち着け、われは耳を傾ける。

### 第2節 まず出自を解き明かす

リクンナイの女はこう切り出した。

「どのような家系なのか、あなたが知らないことでもわたくしには見えるのです。事実はこちらなのです。

その昔トミサンベチ・シヌタプカのあなたの父上は神のごとき尊みことでありましたが、その器量武勇雄弁さは神界にも人間界にもかなうものが一人もいませんでした。それで天の狼神ホロクウカミイの妹がお父上にひたすら恋こがれました。結婚相手としてふさわしいと神界でも認められて、住まいや家宝とともにトミサンベチに降りて来て、父上と連れ添いました。裕福で

幸せな暮らしは神界でも人間界でも評判になり、そのことが遠在近在の者たちに連合軍を組ませ、人々に妬まれ憎まれることになりました。

それゆえ、それからの生涯を戦いばかりのつらい歳月を送っているうち、休戦時に、あなたと妹が生まれました。ご両親は非常に喜んで二人を育てたのですが、その幸せがいっそう憎まれてしまいました。落ち着いて人間界ではゆっくり眠ることもできなくなって、まだ乳飲み子の二人を神の手にゆだねると奏上して神の国に去りました。そして神界からあなたたちを養育したので、あなたは真の頭領の育ちができたのです。

### 第3節 実妹が禁断の恋をして

あなたが山猟に行った時を狙って、アトウイヤウンペが戦い仕掛けるためにやって来て以来、もう長い間戦場で月日を過ごしました。戦いの最中あなたが妹を案じている様子をわたくしは透視していて本当に同情していたのですが、今帰郷の途中シヌタプカの館を透視して見ると、ずいぶん長い間火の気が無いように思われました。まことに不審に思いましたから、さらに透視しました。

あなたが山に出かけてから、妹御は二、三日ほどあなたを待っていましたが帰って来ません。激怒してひどく罵りました。『あたしこそ断然淑女で美人で手仕事が上手なのに、くそ兄さまはあたしにあきたらないから、土産を持って帰るとあたしをだまして山猟に出かけたんだわ。今頃はきっとどこかの国の女といちゃつきあっているにちがいないわ。好きなように振舞うがいいわ。たとえ兄さまであっても少しでも助かるとは思わないでね！これから沖の島人の村を訪ねて、誰かに頼んで大戦争をシヌタプカに仕掛けてやる。くそ兄貴をぶっ殺してから、トミサムベチの立派な神器什器全てを沖の島人の島々に運んでいったならば、断崖にある砦の堅固な懐で安眠するみたいに絶対安全でしょう。ほんとにいい考えだわ』というような悪い思いに捕らわれ、嫁入り道具の物入れに宝物をいっぱい押し込んで、遙か遠い沖の島人の島々に出かけました。

### 第4節 腹いせに沖の国々を歴訪し

最初の村はその名も有名なカイボク(波下)村で、カイボクびとには一人の妹がいて、神のごとき掟で自分の村を平和に治めている頭領なのです。妹御

はそこに行ってかくかくしかじかと頼んだところ、カイボクびとは自分の太刀の柄へ手をかけながら現れました。

『とんでもない本島人の馬鹿女めが！村ともども神に畏ればばからぬことを汝は言うのか。何神でも何様でも、どんなに器量がよかったとしても同じ母から生まれた者同士は結婚するものではないのに、小娘がいつのまにか色気づいたか。これを称して愛慾の化け物に取り憑かれた者といい、魔神の畜生道に落ちた者だという。この極悪の神を一刻も早く掃き出してしまえ』

と危うく斬り殺されそうになりました。

妹御だって死ぬのはいやだ。驚いて逃げ出したその先はその名も有名なカニベツ(金川)村で、優れた首領であるカニベツびとも怒りでもって不機嫌になり、

『もう少しで斬り殺すところだったが、どんなに人に災難をもたらす罰あたりの妖魔に憑かれている者であっても、トミサムベチ・シヌタプカの評判を聞くだけでも敬い奉っていた神のごとき勇者の妹を勝手に斬り殺すことはできない』

と、こっぴどく悪態をつきながらぶいっと外へ出て行ってしまいました。

### 第5節 クロッベツの男と結婚した

腹を立てながら逃げ出した妹御が次に訪ねたのはその名も有名なクロッベツ(陰川)です。妹御が泣きながら頼んだところ、クロッベツびともあやうく断りそうになったけれど、妹御の美貌に一目惚れしてしまいました。そこで『トミサムベチの神宝をほんとに欲しくてならない。小陸人がいくら勇士だとしても、たくさんの村を糾合すれば勝てるだろう。本島人の村で評判の神宝を沖の島人の島々に運んで幸せになれる』と考えて、妹御の要請に承諾しました。妹御は非常に喜んですぐにクロッベツびとと結婚し、かなり長い間夫妻共々笑いながら暮らしていたのです。わたくしは今はじめてそれを見透したのです。

### 第6節 クロッベツの謀略

クロッベツびとの妹はちょっとした巫術をする者でしたから、ひとりでいろいろ思い巡らしました。『ずいぶん長い間評判だった小陸人たちの子孫はこんなにも美しいのか。実妹が実兄に恋をしたのが

事の始まりというから、男はどんなにか美男なのであろうか。<sup>ヤウングル</sup>本島人の女がわが兄上と夫婦になるのなら、<sup>わらわ</sup>妾は<sup>ボンヤウンベ</sup>小陸人のそばで、せめて水汲みや薪とりをする下女にしてもらい、煮炊もしてあげたい』と密かに考えました。<sup>ボンヤウンベ</sup>小陸人は行ったのか占うために、仮病をつかって寝床の上に身を横たえました。それからずっと術で透視していて、山でのアトウイヤウンペとの出来事から今日までのことを皆ことごとく透視しました。そしてはるか遠くからでも、あなたの立派な風貌にすっかり惚れこんであなたを夫にしたいくなりました。けれども、至高の巫女のわたくしにはとても齒が立ちません。<sup>あいづま</sup>相妻になっても、わたくしの手足の小指にも及びません。本当に無念に思い、わたくしを羨んで泣きながら、どうしたら<sup>ボンヤウンベ</sup>小陸人に触れるだけでもできないかしらとあれこれ心をかき乱していました。

その間にクロッベツビとが周りの島々を<sup>あお</sup>煽って連合軍を組み、今クロッベツ村にその軍勢が上陸したのです。シヌタプカを襲う前に、まず自分たちの祭神に先勝祈願するために酒を造って今夜飲もうとしています。

また、先程わたくしたちが殺したばかりの、わが悪兄リクンナイウングル、アトウイヤ兄妹、ポンモシリ兄妹、ポンチュプカ兄妹の総勢七人が生き返って来て、<sup>チセク トウレン</sup>実妹の呼びかけはすっかり皆を喜ばせ、今夜全員クロッベツ村に集合しました。リクンナイの悪兄は『リクンナイびとがいるなら畏れる者は一人もいない』と主賓として待遇され、今夜から二、三日酒宴をしてから、戦さの支度をするでしょう。クロッベツビとが妻を愛するあまり<sup>サム</sup>和人の<sup>カミ</sup>着物を着せ、袖をぶらぶらさせて喜んでいることも全部透視しました。

今ようやく戦さを終えて、束の間でも休めるかと思っただけなのに、どうやらこの状態であなただけが待ち伏せされているのが見えたので、わたくしは驚き、悼み泣いているのです」

とリクンナイの女は包み隠さず全て語り終えた。

## 第7節 ポンヤウンベの嘆き

ただ聞いただけで一日じゅう国土が揺れるほど驚愕した。

「わが悪妹のちくしょうめ、何神かに憑かれたのか、恥をかかせるにしてもほどがある。どうやらりっぱ

な家系のわれら兄妹は、神の国にいる両親たちから育てられたのであった。昔あったことが今の世になってあらわれたために、このように悩ませられているのだった。この戦さ合間に少しでも休めると思っていたのに、また激戦の準備がなされているとのことであるから、勇士の血を引く族長家系のわれであったが、いささか心細くなる。リクンナイの神のような<sup>にょにん</sup>女人の超度級の巫術にそう託宣されて驚いてしまった。幸いリクンナイの女人がわれを助けに駆けつけてきたそのお蔭で、このように悪いことも善いことも聞けたのだから、うれし泣きで死んでしまうほどわれは感謝した。

リクンナイの女人はわが心を透視してわれに同情しかつ恐縮していることを、われも手に取る如くわかった。そこで

「リクンナイのわがいとしの妻よ、われが平穩に守ってきたこのトミサムベチ・シヌタプカであったが、疲れていても仕方がない。われらはその大軍を迎え撃たねば」

とわれが言えば、

「おっしゃるとおりです。早く行きましょう」

すぐまた折りかえし天空上にわれは高く飛び上がる。われの後ろに彼女も続く。疾走する神風の先にわれらは軽々と持ち上げられた。

## 第6章 クロッベツ村

### 第1節 道行きでの変身

ある時は天空でわれらは金の孔雀の夫婦神に変身した。もつれ合い共にひるがえり、神々しい光が月光の矢のようにぴかぴかする。

川端の木原の上にわれらは降りた。われらは金の小さな狼の夫婦神に変身して、金色の毛がピカピカ光る。神々しい光が川端の木原の間を明るく輝いていると思ったら、われは天空上にふいっと消え、数多の雲の間いくつもの雲間をわれは滑り降りた。このように早くわれが走るのに、リクンナイの女わがいとしの妻はわれを何度も追い越しながらわが傍らを疾走する。

と思ったら、はるか高い所から大海原に真っ逆さまにのめりこみ、海の底でわれらは小さなシャチの夫婦神に変身した。シャチの角に盡なる光がピカピカ閃く。速やかに泳ぎ行く魚群の先頭からその魚群の

末尾まで、われは魚と一緒に泳ぎ回る。ゆっくりと頭を沈め海の下に潜って行くと、薄造りの上等な兜の兜の表面と神授の太刀の表面に潮の打ちあたる音パタパタと鳴る。リクンナイの女わがいとしの妻がわが脇の下あたりでうち笑う声が美しく響いた、と思ったら天空上に飛びあがった。

## 第2節 参集した沖人たち

われらが行きに行くとやがて日が暮れた。何という郷なのか、まだ明けはなれざる夜のうちであったが、屋根屋根はずらっと揃ってわが眼前に高々とせりあがってきた。里川が清らかに輝いて下っていた。その河口に降りた。わが妻はどこに跳んで行ったか見失ってしまった。

その河口に立って見ると、驚いたなあ、河口の早瀬を守る水の神がいらっしゃるのだろうか。この大河は遠くから流れ来たものだから、川の上流は低く下へ沈んで見え、河口は大海原へ広い波立つ瀬を成して流れ込んでいる。まったく好ましく感動的だ。

海辺には戦さ船が押し寄せていて、まず先にあがった船は山手がわの草が生いる砂丘の上まで引きあげられ、あとにあがった船は砂浜側の砂丘の上の草原へ引きあげられている。そのあとにあがった船は乾いた砂浜の上へ引きあげられ、そのあとにあがった船は波打ち際の濡れた砂浜の上へ引きあげられている。そのあと続く船は沖までずらっとつながれていた。

ひとつつ向こうの海辺にはたくさんの<sup>とま</sup>苦造りの<sup>トマカシ</sup>仮小屋茅造りの仮小屋がずらっと建ち並んでいる。そのかみでは先が見えないほど遙か遠く、そのしもてはかすむほど遠い。炉火が明るく輝いていた。

村の中央に盛り上がる孤峰が立っていた。われは少しの音もたてずに舞い上がり、山頂に鳥が木の枝に止まるそっくりに舞い降りた。山頂に<sup>おおだて</sup>大館が山城に重なり立っている。まだ明が明けてはいなかったが、館の装飾は好ましい。館内の炉火が戸外の焚き火ごとく盛んに燃えている。

館のすぐそばにわれは忍び寄り、横座の窓に垂れているすだれの裾にひざをつき、すだれ窓に顔をくっつけた。編み目のすきまに眼をおしあてて見れば、驚いたなあ、この大館の内部はあまりにも立派で隅々までほれほれする。この大館の内部は大勢の者が霧がたちこめるようにいっぱい居る。どの目つき

も見おぼえない奴らが上座で長い酒宴の席にずらりと居並んでいた。酒宴のかみのはてから酒宴のしものはては先が見えないほど遙か遠い。鎧を着ている人々の列はいかめしく物々しい。

<sup>ほかい</sup>行器後の主賓の座が稲妻のようにピカッピカッと閃いていた。よく見ればリクンナイウンベだ。一度死んで神が生き返らせた者ゆえ、ますますもってすごみがあるほど美しい。その隣にアトゥイヤウンペ、ポンモシリウンペ、ポンチュプカウンペが対座している。女性たちの席にはアトゥイヤの女、ポンモシリの女、ポンチュプカの女が全て神が生き返らせた者であるから、いまや最も美しい姿で宴席に仲間入りしている。本当にリクンナイのわがいとしの妻が託宣したとおりだった。

右座で酒宴の亭主役をしている霧の中心部を眼力で散らして見ると、話に聞いていたところのクロッベツビと、一年ほどわれより年上の若者で、武装も<sup>はき</sup>佩刀もどこからどこまで素晴らしい者が座っていた。何者なのか、さして大きくない丸い霧の塊が酒席の間をあちこち酌をしてまわっている。その霧の中には、わが悪妹ならばこれくらい大きくなっていると思われ若い女だ。今ようやく女の肌衣の胸の紐を胸元高く頸もとまで締め、和人の着物の両袖をぶらぶらさせている。美しい髪の毛は絹のように頭上におおいかぶさっていて、髪の毛の下には顔から発する光が明るく輝き、その髪の毛のさきには光がつきまどっている。ほめる言葉も見つからないほど美しい。手に持つ銚子を自分の脇の下の方に寄せて抱え持ち、酒席の間をさりげなく酌をしてまわっている。クロッベツの奴は上機嫌でいくつもの冗談を交わしている。

酒宴に列席している大勢の者が膝で突つき合い腕で突つき合い、一人が言うあとの半分をば他の者が受取ってなにごとかを夢中で喋っている。耳をそばだててじっと聞き入ったところ、

「どのような顔つきのどんな口つきの奴が<sup>ボンヤウンベ</sup>小陸人<sup>トイケンベ</sup>くされ陸人なのか、あいつだけが度胸も器量がいいのだから知らないが、大変な評判が聞こえている。われらとて勇士であり族長であるのに、われらと同じく二本の脚をはやし二本の手をはやしている男にちがいないくせに、もしここに来たらこうして負かしてやるのに」

とずいぶん長い間あれこれ話しているのであった。そうするとリクンナイの奴はまあ、まあ、まあとそれを抑えて小声で言ったことには、

「これこれ、勇者たち族長たちよ。おひかえなされ。あるまじきことは勇者や族長の陰口をきくことだ。そういうことを言うともみずからわれらのいのちをあぶなくするものだと言うぞ。小陸人<sup>ボンキウンベ</sup>はどうやら人間以上の力を持っていると言われていぞ。我が輩ほどの者であってもかなわないのだ。今われは神の手で蘇った。われ以外小陸人<sup>ボンキウンベ</sup>に報復できるものはいないのであるよ」

その間だけはシーンとしていたが、少し経つと、またかんかんがくがくやりあっている。

おおあわれな。赤の他人がわれの陰口を言うのでさえいまましいのに、同じ母親から生まれた妹が厳しい戦さをわれに仕掛けた。リクンナイびとほどの貴人が正しい行いをしたのならば、大事にしてつきあえるのに、とわれは思うから、声もなくはらはらと涙を流し自分を憐れんだ。

### 第3節 仮病するクロッベツの女

クロッベツの奴は自分の後ろの方を何度も振り向き、

「これこれ、わが妹よ。何の病いのせいでそなたは寝込んだのだい？ 酒はいつもあるものではない。小陸人<sup>ボンキウンベ</sup>を襲撃する前の酒宴に、何でそなたが寝ていることがあるのだ。女であってもそなたは男の勇士をはるかにしのぐほどののに、そなたは何を考えてそうしているのだい？ 強い憑き神の持ち主であるそなたなのだぞ。手足を伸ばして自分に気合いを入れて起きあがり、酒を飲み酒糟<sup>さけかす</sup>を食べなさい」

と憂いに満ちた言葉をかけ続けている。見れば右座がわの掛け竿の陰に何者かが寝ているようではあるが、動く気配もない。大勢の女性たちの舞う声おどる声がにぎやかだ。

### 第4節 リクンナイ女のいたずら

そのうちわがすぐそばに人影が忽然とあらわれ出た。見ると、まさかまたそうなるとは思わなかったのに、リクンナイの女わがいとしい妻が黄金の鉢に縁からあふれんばかりになみなみと酒を注いでいた。漆塗りの大杯を手でおさえて満足げに笑い、「とつてもお酒を飲みたくなったから、ちょっぴりおいしいお酒を盗んできたのでございますよ」と言って、こ

の杯をわれに差し伸べた。

なんとまあわれは喜んだだろうか、あまりにも空腹で今にも死にそうに思っていたところだったので、喜んで杯を受け取った。今はじめて酒というものをわれは飲んだ。なんとまあうまかっただろうか。心臓のすみずみまでのびのびとした。実にいい気持ちになった。それからわがいとしい妻と差しつ差されつ、小声で色々なことを囁きあい飲み終えた。それからまたわがいとしい妻はどこに跳んで行ったかわれは見失った。

### 第5節 ポンモシリ女の巫術

少し経つと、リクンナイの奴が大杯<sup>トウキ</sup>に、上に渡している酒箸<sup>バスイ</sup>がただようほどなみなみと酒を注いで高く突き出しながらこう言った。

「これこれ、ポンモシリウマツよ。ここに来てわれが口をつけた杯を受け取って飲み干してから自分の護り神を勢いづけてください。うまき酒の最初の酒を主賓の座で飲むことは本当に名誉なのだが、どうしたわけか急にわれの魂がびくびく不安におびえ、今にも誰かがわれを斬り殺しそうに思える。他のことへ思いを逸らそうとすると、ますます気になるのだ。小陸人<sup>ボンキウンベ</sup>とわが不肖の妹がどうなったのか占ってほしい。われが小陸人<sup>ボンキウンベ</sup>と一緒に死んだことだけはわかっている。トミサンベチに奴らは戻って来たのか来ていないのか。そのことが本当に聞きたいのである。それからこの酒宴が無事に済み御神酒も捧げ終えることができるのかもお聞かせ願いたい」

ポンモシリの女は慎み深く膝で進み這うように歩みよって来て、杯の下かげにうつむいて杯を受けとり額の高さまで押しいただき下へさげて押しいただきそれに拝礼してから今まさに飲もうとした。ちょうどその瞬間、上座の棟木の上の方から細く白い靄の糸筋が垂れ下がってきたかと思うと、その大杯がからっぽになった。口をつけようとしていたポンモシリ女は情けなく口惜しかったものだから、後ろへ振り向いて涙をぬぐった。リクンナイの奴も大勢の奴らもそんなこととは知らない。

不思議だったので、上座の棟木の上を見ると、まさかそうとは思わなかったのに、リクンナイウマツがその棟木の上に腰掛けて両足をぶらぶらさせ、にやにや笑いながら宴席を観察していて、ポンモシリ女に与えられた飲みさしの杯を奪い取って飲むと

ころなのであった。本当にまあわがいとしい妻の巫術の力や悪戯が上手なこと。少しうさが晴れた。

ポンモシリの女は左座の炉端に座り、懐から黄金の小撥こばちを取り出した。それから彼女が謡う唄節は神が天に還っていく時のように美しくひびいた。なんとまあその唄は上手だったことであろうか。ある時は泣きながら、ある時は黄金の小撥で顔の脇をキラッキラと閃かしている。このような巫女唄を懸命に謡っているうちに巫女唄がふいとぎれてこんな託宣がくださった。「これこれ、リクンナイびと神のごとき勇者よ。妾わらわが言うことをよくお聞きなさい。憑き神の力を強めて巫術して見ると、トミサンベチと言うから、人間の館のようであることを言っているのかと思っていたのに、草木が一本もない険しい岩山が天空に高々とそびえ立っていて、山の中腹まで黒い霧がぐるりと取り囲んでいる。その平らな山頂に美しい館とりっぱな柵構えが重なり立っているように思われる。館の中を見ようとして巫力を強めても、妾わらわには見えない。しかしかなり長い間火が焚かれていない留守の城であることだけはわかった。それから先はわが目先がサッとふさがり、もう何も術視できなくなった」

リクンナイの女わが妻は忍び笑っている。大勢の者がじっと聞き入っていた。

## 第6節 アトゥイヤ女の巫術

リクンナイの奴はこう言った。

「小陸人ボンヤウンベと一緒にわが死んでいるあいだ、わが悪妹はどこか行ったのか。強い憑き神の持ち主である悪妹だから、小陸人ボンヤウンベを蘇生させて今はシヌタプカで笑い合いながら暮らしていると思っていたのに、どうして城が空っぽだと言うのか？まさか小陸人ボンヤウンベが死んでしまったわけではあるまいな。もっとしっかり透視ボンヤウンベして小陸人とわが悪妹が今どこにいるのか、この酒宴を終えたのち、われらはシヌタプカを攻められるのか、もっとくわしく聞きたいぞ。さあさあ！アトゥイヤの女至高の巫女よ、わがお流れの杯を飲み干して憑き神を勢いづけてくだされ」

と言ってなみなみと酒が入った杯を差し出した。アトゥイヤ女は慎み深く膝行しつこうして、受けとり高く低く押しいたいだて拝礼し、今まさに飲もうとして口をつけた瞬間、棟木の上のから白い霧が一筋垂れ下ってきて杯が空になり、アトゥイヤ女は一滴も飲め

なかった。口惜しく恥ずかしくて後ろを向いて涙をぬぐったが、前と同様宴席にいる者どもは全く気がつかない。

なんとまあうつぶんが晴れたことか、われら二人は心の中でひそかにおかしがっていた。

アトゥイヤの女は黄金の小撥を取り出して巫女唄を美しく響かせる。ポンモシリの女の巫女唄など物の数ではない。ある時は泣きながら、ある時は黄金の小撥をキラッキラと閃かして一生懸命占っているうち神降ろしの巫女唄がふいとぎれてこんな託宣がくださった。

「これこれ、リクンナイびと神のようなお方よ。妾わらわが言うからよく聞きやれ。透視すると、シヌタプカの山城は本当に留守であることがわかった。

小陸人ボンヤウンベが帰還する途中、何者かが天空を併走して神風を走らせて急に川端の木原の上に降りたように思ったら、空中に金の孔雀の夫婦神が身体を神々しい光に輝かせていた。くちばしくちばしといえは投げ槍のように、爪といえは小さな鎌林の如くするどく尖っているようなものがもつれ合いながら、いくつもの雲間を滑り降りる。見逃がしてなるものかと懸命に巫力を強めた。すぐ折るかえし沖レブングルの島人の村々へやってくると思ったのに、はるか高い所から大海原の底に飛び込んだ。妾わらわはなおも巫力を強めた。海の底で若いシヤチの夫婦神が速やかに泳ぎ去る魚群の先頭から末端まで魚と一緒に泳ぎ回っていた。ある時は素早く頭を沈めて海に潜って行き、時にはゆっくりと頭を沈め海に潜って行くと思ったら、川端の木原の上に降りてきた。

見れば金の若い狼の夫婦神で金色の毛の上一帯がピカピカ光る。耳を寝かして並んで走って来て、今クロッベツ村に近づくと、再びまた天空に高く飛び上がった。クロッベツ川の河口に降りたと妾わらわが思ったとたん、それからどこに行ったかどこに跳んだかわからなくなってしまった。

さらにこの酒宴の座ふせんを巫占して見ると、どうしたことなのか、この宴席の上に飛び上がった何者かが星の光りのように右座に跳び上座に跳び左座に跳び、大勢の者がその刀の先でズバズバと音を立てた。戸口や窓から外へ出た者は、何者かが片っぱしから斬り殺し斬り散らす。美しい館の上座では何者かが炉の大きな燃えさし小さな燃えさしを足で蹴散らし足

で蹴飛ばした。たちまち床の上に薄い小さな炎が一所に焔を這わせて行く。火を消しとめようとする者が焔のそばへ駆けつけると、炎とともに突き殺され叩き殺された。そこで初めてあわてふためく声がわき起り、身から離れたあまたの生き霊の死ぬ音が後から後から続く。やがて神の館の中に焔が走り、焼け落ちる寸前に何者かは戸外へ跳んで出た。

それからクロッベツ村の村内で持久戦がはじまり、何十日も幾十日も続いたあげく、いくさの終りに空がぱっと晴れた。

それから天空上で本島人の太刀と沖の島人の太刀が交叉して血が流れ落ち、やがて沖の島人の刀の吊り帯の真ん中がスパッと切れた。西の方に音が低く低く下へ下へと沈んでゆき、再生できない霊は黄泉の国へ入っていき、雷鳴が去った後に空がぱっと晴れた。

本島人の太刀はたくさんの血の枝川いくつもの血の枝川が交叉し、東の方にぶら下がって光り輝いていた。それを見たとたんにわが目の先がサッとふさがってしまった」

と述べ終えた。本当なのか、アトウイヤ女が巫占したことは！酒宴の一同は誰もがはたと口をつぐみ、あたり一帯シーンとして何の声も何の音もしない。なんとまあわれはうっぷんが晴れただろうか。蔭でひそかに笑っていた。

リクンナイウンベはいつでも元気だったのに、頸骨の上から消えたみたいに深く俯いている。酒宴の男性陣も女性陣も同様に深く俯いている。本当に心配して一同顔を挙げる様子もない。

ややしばらく経ってから、リクンナイの奴が高笑いした上でこう言った。

「よい、よい。勇者たち、族長たちよ。もうそれ以上心配したり怖がったりしなさいますな。それこそ相手は行く先々で必ずいくさを起こすいくさの引受け屋と言われる奴なのでありますぞ。小陸人とわが悪妹がどれほど勇猛で強い守り神が憑いてるとしても何十もの村の人々が今クロッベツ村に上陸したようだ。それ以外にこんなにも胆力ある勇者ばかり族長ばかり巫女ばかりが肩を並べているのだ。雑兵ばかりでも奴らは歯が立たず手余しすると思われる。そんな託宣は少しも本気にしないぞ。さあさあ、飲みましょう。楽しみましょう。もう小陸人とわが悪

妹は二人とも遙か遠いシヌタブカへ還ってしまったそうだ。ここでわれらが酒宴をしていることが聞こえてもこっちは来ないだろう」

一同は「なるほどなるほどリクンナイびと神のごとき勇者が言うとおりで」とさわぎ合っている。くされ沖の島人らが皆で言い合っているのを憎たらしく思い一方では可笑しくてしかたなかった。

## 第7節 見破ったクロッベツの女

そのうち右座にある掛け竿の下でバンと音がした。何者か炉端に出てきた者を見ようとして、丸い靄の中心をわれは眼力で散らし見る。見れば世に言うところのクロッベツウンマツ、いくら褒めても褒めたりない程の美女だが、連日一口も食べていないものだったからちょっと痩せていて顔色も悪い。寝巻きの絹小袖の胸元をくわえ、裾前を手でおさえながらこの怒号の言葉をバァーッと燃え上がらせてこうあるには、

「アチカラタ、アヤカンナタ！ポンモシリ女とアトウイヤ女よ、何ということを恥ずかしげもなく言うもんだわ。そんなことを言っているものが生意気千万にも巫女と呼ばれて、生き返ってそのようにしゃべっているのか。妾の手の小指わが足の小指にも及ばない者たちが巫術して透視して巫占の内容を託宣すると言うのなら、ありのまま言わずに、どうして二人とも透視の根本を言わずにその周辺ばかりを言うのか」

とはげしく悪態をついた。くされ女がまさかまたそんなことを言うとは思わなかったのに、

「小陸人はこの酒宴の最初からあの神窓の下にいてわが館の内部はかなり長い間見られていた。こうしてしゃべっていることでも全て筒抜けで、奴は笑い嘲けているのだ。リクンナイのくされ女は、無礼千万にも、このわが館の屋根西端や東端の煙出し部分や天井の煙出し穴からでも再三入ってきて宴席集う族長の上を跨いで旋回している。小陸人が好む酒なものだから、育ての兄リクンナイウンクルが手にした汲みたての酒を大鉢で再三再四盗み取って窓下に運んで二人で饗応に預かった。その合間にも上座の棟木上に腰掛けて宴席の上において勇士たちの頭上上族長たちの頭上に両足をぶらぶらさせていて、ポンモシリ女やアトウイヤ女がリクンナイびとからお流れを頂戴してちょうど飲もうとすると、ただ空杯

だけに口をつけさせられた。二人ともリクンナイびと神のようなお方が空の杯でお流れを与えたのだと思って、情けなく恥ずかしくて涙を浮かべていても一同はそうとは知らずにいた。そんなことも小陸人<sup>ポイヤウンベ</sup>とリクンナイの女は大いに嘲けて鬱憤を晴らしていた。そのうち二人の巫女たちがすっかり馬鹿者みたいにリクンナイの女から巫女唄を謡わされているのをよくご覧」

とクロッベツ女が淀みなく解説し、数々の悪口雑言をぶちまけた。大勢の者が驚いて、いっせいに棟木を見上げて、もうすでにリクンナイの女は消えている。リクンナイの奴はクロッベツ女の託宣を聞いて息もとまるくらい驚いた。好い気味だ！

## 第8節 ポンヤウンベ参上

われは少し恥ずかしくなった。クロッベツ女が連日一口も食わずに寝込んで全力をだして透視していて何でも詳細に託宣したのには驚いてしまった。

そこでたった今来たふりをして窓の下から魚が向きを変えるさながらについと離れ、館のそばで固い地面を柔らかい土のようにわが足下に踏みにじり、入り口の土間にわれは向かう。族長や勇士の威風が強風のようにわれをたじたじと後ずさりさせる。

母屋入り口のすだれ<sup>すだれ</sup>に手をかけ簾の上端の糸を引きちぎって自分の後ろへかなぐり棄て、内土間に光を放つ靄に身を包んでわれはグイッと入っていった。わが眼は怒りのあまり二つの星のようにギラギラ光って顔の両わきにはまっている。酒宴の列席者は誰もがはたと口をつぐみ、あたり一帯シーンとして何の音も何の声もしない。一同がわれのほうをじっと見つめても、ただわが靄だけしか見えない。

左座でおどっている者たちの上に脚をあげて踏みしだいた者は、死んだ魚がビシャッと落ち潰れるそれさながらに潰れ、わが近くで踏みつけた者は死んだ魚がはたはたと身を反らすそれさながらにのたうち回る。

わが刀鏢の鳴る音が高く響く。第一等の上席である横座に座っている者を脚を高くあげてわれは左座の方へ蹴落とした。急に蹴飛ばされたものだから、ムクの根が転がるそれさながらにコロコロ転がった。そ奴が座っていた横座にわれが座る音ガチャリと響く。わが悪妹の畜生は酒席の間をあちこちまわって酌をしていたのに、わが靄を眼ざとく目撃し、「アヨ

ボオヨヨ!」と言って自分の後ろの隅に飛び込んだ。

座るやいなや、われはクロッベツの奴の目玉の真ん中をにらんだ。奴は今初めてわれを見たものだから、靄の真ん中を散らして見たが、どうしても見えない。奴の顔の前へわれは顔をつき出し、若々しい物言いでこう言った。

「クロッベツびとわが妹婿どのよ。ご挨拶<sup>イラハツ</sup>申し上げます。妹婿になったと聞いたが、それほどたいしたことがないような者をでも言っているのかと思っていたのに、それこそ勇者なのか族長なのかすばらしく立派な様子だなあ。もっと劣っている者であってもわれは喜んだのに」

われが言えば、奴は急に顔色を土気色に変えて下座の方へ上座の方へと顎をまわしている。

不肖の妹をわれは観察した。わざと何度も何度深くもうなづきながら笑顔をむけて、自分の傍らの席を叩き叩きこう言った。

「ご挨拶<sup>イラハツ</sup>申し上げます。わが妹よ。もうこんなに大きくなっていったのか、ここのわがそばにおいて。久しぶりに会った挨拶の礼をしようぞ。われが山獵に行った後、しっかりわが館を守っていなさいとわれが言ったのに、どうして沖の島人村<sup>レブンクル</sup>にそなたは行ったのか？父祖代々住んで来た山城故郷の山城をまさか軽んじたのではあるまいな？強い守り神の持ち主であるそなたならば、われが山獵に行って今の今までどんな目に合って遅くなったか、そなたは解っているにちがいないのに」

すると大怪物の妹ははたして

「アチカラタ、アヤカンナタ！わがくそ兄貴のちくしょうがいい気になりおって。妾<sup>わらわ</sup>こそ淑女であり、針仕事の名手であり、器量よしであるのに、リクンナイの女だけが淑女か、あいつだけが器量よしだからとて、惚れくさっていちやつきあって、腹のみ子のみ無いだけで同衾してやがる。その間だまされて毎日誰もいない家で妾<sup>わらわ</sup>が留守番していたのにも腹が立つ。それゆえ沖の島人村<sup>レブンクル</sup>に行って兄者を殺す依頼をしたのよ」

と言って顔をつんとそむけた。リクンナイのわが妻の霊視したとおりだ。今はどうしようもない。このように魔神の心を持つ者はわれが何を言ってもまったく聞き分けがないように思われる。

クロッベツの奴はわが顔をまともに見ず目を伏せ

てはいるが、顔の奥底ではにくにくしげな色を浮かべて顔つきがおそろしげだ。

「これこれ、クロッベツびとよ。たとえ戦いに臨む前であっても、酒というものは飲ませ合いますのですぞ。酒があるらしいですな。何か飲ませてくだされ」

とわれが言ったところ、ほっとしたらしく、お膳に金蒔絵の大きな杯<sup>トウキ</sup>を置き、金蒔絵の鉢<sup>ハチ</sup>の縁からあふれんばかりになみなみと酒を満たして出した。この大杯をわれに差し出し、われは受け取る。奴は渡す奉酒箸の上まであふれるほどわれに酌をした。われに狂うばかりの凶暴な怒りがわき起こってきた。

これがくされ沖の島人に貰って初めて飲む酒なのかと思ったから、この大杯をクロッベツの奴の顔に叩きつけたその音わが手先にドスンとひびく。大杯が粉々になって砕け散った。奴は目から鼻から口から顔じゅうすっかり酒を浴び、咽せて咳込み何度もくしゃみする。いい気味だ。跳び上がる途中わが手元ピカリと光り、激しい太刀を奴に振りとはしたが、この大怪物は座っていた床からさっと消えていなくなった。大鉢を棟木の上に叩きつけたその音わが手先にドスンとひびき、上座に大鉢が粉々に砕け散った。

わが悪妹にわれは跳びかかり、髪の毛をひつつかんで手に絡み地面に叩きつけた。この怒号の言葉、つき刺すように切りつけるように言った言葉がこうあるには、

「わが悪妹アイヌの極悪妖怪め。ここに至ってお前の言い分があるか。何回でも聞いてやるぞ。何神に憑かれて誑<sup>たが</sup>かされたんだい？同じ母から生まれた者同士は神でも人間でも結婚するものではないこと知らなかったのか。犬の一匹すら身寄り無しのおれであるから、たった独りのわが妹を大事に可愛がっていたのだ。われの背中から腹から、うんこを漏らされたりおしっこを垂れ流されたりしてそなたを育てたのに、あんなおぞましい気持ちをそなたが持っていたのだな。これっぽっちの人の心さえそなたは持っていないのか？少しも兄妹とは考えられないのか？死にたくてくたばりたくて無礼千万なことをわれにしたということなのか」

「くそ兄者はあたしが不足でリクンナイの女ばかりを可愛がっている。いっそ兄者の佩く太刀の刃先の

上に身を投げたならば、死んでよい魂魄<sup>こんぱく</sup>となつてあたしの自慢にするわよ」

もう少しでもっとあさましい殺し方をしてやろうとも考えたのだが、こんな事をいうやつをわが太刀でもって斬るのも腹立たしい。懐をまさぐって金の糸紐を取り出し、妹の手や足を莫菴編み機の重<sup>ビ</sup>り石<sup>ソウ</sup>縛りにぐるぐる縛ってわが足首<sup>ケツチミク</sup>あたりに結びつけ、上座にわれは音もなくすうと行った。

行器<sup>シントコ</sup>後の席にいるリクンナイの奴の両肩先をわれはむずとつかまえ、みしみしと自分の方へ締めつけた。たぐいまれなる勇者の骨節がきりきり鳴り骨じゅうボリボリ折れた。われはにこやかに

「ご挨拶申し上げます。リクンナイびとわが義兄<sup>シウト</sup>どの。汝は懲りもせずに再びまたわれを殺したくて、これなる大戦の総大将になった。われらが平穩に守ってきたトミサンベチ・シヌタプカを戦場にしたいから、クロッベツ村では胆力ある勇者族長ばかりが霧がたちこめるようにいっぱい居て戦いの準備を始めていると聞いたので、クロッベツ村に来襲したのでありますよ。何を理由にどこまでもたった一人の男にすぎないわれを殺そうとするのか。元々われのほうが悪いのであれば、一太刀に斬り殺せるだろうが、汝らのほうが悪いのであれば、いくら何十村の人々を呼んでも、われは少しもおそろしくない。ことごとくわが太刀の刃先の上で命を落としてやるぞ。

まずは二人とも一度死んで撃ち合<sup>ウカハラ</sup>いの決着がつかなかったが、これからはそんなことはしないだろうよ。この小陸人<sup>ボンヨウベン</sup>、あたりまえの人間の憑き神の働き振りに肝をつぶすなよ。今度は本当に勇士同士の二人だけで棍棒を撃ち合、もし汝がわれに全敗したら、一生涯生き恥をさらしてやるぞ。よく聞いておけ」とわれは言い、その言葉が終わらないうちに

「いささか御神酒を飲みたくなったな。汝らの酒を少し飲み喰いさせてくれたまえ」

とわれは言った。奴らが大きな行器<sup>ほかい</sup>に、上に渡している酒箸が漂うほどなみなみと酒を注いだ。われは軽く起ち上がり、片足を遠くに伸ばし、もう片方の足を近くに立てて、この酒を口の中でぶつぶつと幾つもの呪文を唱えてから、わが短い息は詰まりきるまで、わが長い息は伸ばしきるまで飲み続け、とうとう大きな行器の酒を一滴も残さず飲み干した。わ

が心に怒りが勃然とする。リクンナイウンペの頭のとっぺんからこれなる行器を叩きつけたその音わが手先にドスンとひびく。粉々になったかけらが砕け散った。わが手元ピカリと光り、激しい太刀をわれ振りとはばす。いつものとおりこの大怪物はわが揮う強い太刀先さっとかわしてパッと消えてしまった。返す刀をアトウイヤウンペに振りとはばす。まったく同様に奴は座っていた床からさっと消えてしまった。返す刀をポンモシリウンペにわれ振りとはばす。奴はわが揮う強い太刀先さっとかわして、ひとひらの風のようにすべり逃げていった。返す刀をポンチュブカウンペに振りとはばす。いつものことでポンチュブカの奴の動作が急に鈍り、ちぎれた断片が左右へさっと散り、死にゆく魂の天に昇って行く音がゴロゴロと鳴り轟く。

それから大勢の者をわれは蹴散らし跳ねとはばす。わざと、われは右座に跳び左座に跳ぶ。それと同時に炉の大きな燃えさし小さな燃えさしを足にひっかけ蹴飛ばし蹴散らす。たちまち薄い小さな炎が床の上に焰を這わせて行く。こしゃくにも火を消しとめようとする者が焰のそばへ駆けつけた。われはその者どもを炎とともに突き殺し炎とともに叩き殺す。窓や戸口から外へ出た者は何者かが片っぱしから斬り殺し片っぱしから斬り散らし、身から離れたあまたの霊が死ぬ音が絶えまなく続く。焼死した者、炎で死んだ者の魂は冥府へ音低く沈んで行き、おびただしくゴボゴボと鳴り響いている。この大館じゅうに炎が燃え移り炎がふきだして、焼け落ちよる寸前にわれは外に飛び出した。そこで初めてこの山城がわれの方に傾き崩れ落ちてきた。いつものことだが山城の頂上ではわが憑き神と凶変を予知しておびえ騒ぐ首領たちの憑き神が音を立てる。

## 第9節 説諭成らず

見ればクロッベツ村のしもてにも、海辺から川をさかのぼ遡って、誰を討とうとするものか虫がわきかえるそれさながらにたくさんの部隊が幾かさねにも重なり、松明たいまつが明るく輝いていた。その軍勢のすぐそばにわれは駆けよる。どこからかリクンナイウンマツが歓声をあげながら跳んできた。われはわざと首から上が見えなくなるほど何度も何度も深くうなづきにこにこ顔を向けた。酒気がわが顔にじみ出ている。戦さであるはずなのに合戦であるはずなのにわが気

持ちはうきうきしている。リクンナイウンマツとたくさんの冗談いくつもの冗談を交わし合った。

われが強く跳ぶと、それにつれてわが足首に縛り付けたわが悪妹はムクの根がコロコロ転がるそれさながらに転がり、その下で数々の悪口雑言を吐く。

「アチカラ！アヤカンナ！わがくそ兄者のちくしょうめ！リクンナイの女だけが器量よし淑女だからとて、あの女だけを可愛がっていて、あたしをこのように足首に結わえつけた。すぐさまあたしを斬り殺せばいいのに」

と言うから、今すぐ妹を斬り殺してしまおうと思った。妹の話聞いていたリクンナイウンマツはわが不肖の妹にいたく同情したらしく、わが顔前に頭をつき出し小声われにとばした言葉がこうあるには、「これこれ、神のごとき勇者よ。あなたの妹御これほど神のような方はまだ幼いので、まこと神意人道に反する心の持ち主になったことを本当にわたくしは憐れに思います。わたくしが何とかよく教え諭してあげたい。天佑でもって妹御が自分で反省し悔い改めるなら、もはや身寄りも無くなったわたくしですから、ちょうどよいと思うのよ。あなたのかわいい妹をわたくしが好きなように罰してもいいかしら？」

そう言うから本当にわれは喜んだ。われも小声で、「せっかくそのような立派な憐れみの心を持ってあの人間の化け物を教え諭し、幸いにも後悔して一族アイヌ シンナイザムに加えることができたならば本当にわれは嬉しいのだが、今はもうわれは降参だ。何回道理を言い聞かせても、ますます妹を激怒せるばかりなのだ。そなたの好きなように殺しても、妹は極悪の神に憑かれているのだから、われは怒りもしないし惜しみもしない。至高の巫女であるそなたが、どんなに熱心に説得してもなおさら悪くなると思う」

と言った。彼女はわが足首から悪妹を解き放って、少し後ろに連れて行って微笑みながら愛おしそうにたくさんの道理を教え諭した。しかしわが不肖の妹はどこまでも眉をひくひく動かし眉をしかめしかめ、悪態をつくのをやめない。リクンナイウンマツも本当に呆れて悪妹を今度は自分の足首に縛り付けて戦った。われも内心あきれはてていた。

## 第10節 うち続く戦い

大勢の者がわが刀の前でズバズバと音を立てる。

最初の戦い前の戦いなど比べものにならない。

わが憑き神は数々の轟音数多の轟音をわが頭上に響かせ、尻尾がついているたくさんの竜巻数多の旋風が戦闘の上におおいかぶさる。いつものとおり鎧の軽いものは竜巻の先端に枯葉が吹きあがるそれさながらに舞い上がり、空中に様々な草の葉っぱや土埃をパッパッとはね飛ばし、<sup>あまた</sup> 烈しい吹雪のつむじ風をなして吹きあげる。その合間に大勢の者が入り交じりぐるぐると渦巻いて、ある者は海面に落下し、ある者は遠い山々近い山々頂上に落ちていった。海で死ぬ者山に落ちて死ぬ者木に突き刺さって死んだ者の身から離れたあまたの霊が死んで相和するその音が国土の底に鳴りとどろく。リクンナイの奴はいつもと同じく自分の鼻や口の前に拳をあてて、

「本当にまあ小陸人の憑き神のだんだん強くなるその音はなんという働きぶりか動きぶりか、驚いたなあ！おそろしやおそろしや！その戦いぶりは！早くまた戦いの終盤に再びまた勇者同士のわれらだけで互いに立ち合いたいなあ」

と驚きながらも声をあげて下知をくだしている。

### 第11節 涙するクロッベツの女

軍勢の背後ではクロッベツの女があいかわらず寝巻きの絹小袖の裾前を手で押さえ胸元を<sup>か</sup>噛みながら、あまたの軍勢を超え、<sup>つまき</sup> 爪先立ったり腰をかがめたりしてわれを包む靄の真ん中を散らし見た。何度しても人間の姿にしてわれを見るができない。同じ様にまたリクンナイの女わがいとしの妻の靄を散らしに散らして見ても、われら二人の顔をよく見ることもできなかったが、ただふつうにわれらを感じるのであるならいいのに、わが顔をまともに見ず目を伏せている。何を思ってなのか、後ろへ振り向いて涙をぬぐった。リクンナイウンマツが跳び回っている最中わが顔前に顔をつき出して、

「わが君さまよ。ほらあそこを見てごらんさい。クロッベツウンマツがおかわいそうに。どんなにか惜しくて一人で思い煩ってばかりいらしたのねえ」と言うから、われの笑う声が高く響く。クロッベツのくされ女が大衆の面前でわれらに全くひどいことを言ったのに、今さらしおらしく振る舞っているから、ざまあ見ろ、好い気味だ。クロッベツの女は、われがたいして美男なわけでもなく、たいした容姿でもないのに美男でもあるかの如くわれに惚れてし

まって、みんなの近くで思い悩んでいたようだから、驚いた。彼女を見るとリクンナイウンマツのわずか半分ほどにも美しくない。われは心の中で冷笑していた。

### 第12節 巫女たちの口論

これなる戦さは、どこへやら怒濤のように押し進む。何人かが斬られて何人かが殺されて、リクンナイウンマツのただ刀影のみピカピカ閃いて見えるだけ。彼女は敵陣を小さな畑くらいの広さ大きな畑ほどの面積を刈り取るごとく斬り倒して行く。

夜も昼も若い娘の笑い声物言う声が響き、有ること無いこと虚実とりませおしゃべりしてわれを笑わせる。軍勢の背後ではアトウイヤの女が総大将になり、甲高く舌打ちして

「アチカラタ、アヤカンナ！リクンナイ女と小陸人は花嫁花婿の顔合わせして何かそれらしき約束事でも交わしたのか」

と言っているから、リクンナイウンマツがますます笑うその声が高く響く。

「何をおっしゃる、アトウイヤのポンモシリのポンチュプカの至高の巫女たちよ。懲りもせず恐れ入りもせず恥ずかしげもなく言うものね。もう少し経ったら、また尻丸出し尻餅ついたまま危急の叫び声をあげることになるわよ。神の如きわが<sup>きみ</sup>君わが夫に向かってわたくしが勝手に言ったのに、なんという言いぐさ。おかわいそうに。そんなこと言って何かいいことがありますの。羨ましがって言っているのね」三人の巫女は以前のことを思い出して恐れ入ったものだから、急にそっぽを向いた。リクンナイウンマツは片手の指を上下へゆっくり動かし吐き捨てるように

「アチカラタ、アヤカンナタ！わが手の小指わが足の小指にも及ばない巫女たちよ。こしゃくなことを言ったわね。何も言わないほうがいいわよ。<sup>わたし</sup> 妾はずいぶん前から言っていたのに、まだあなた方はそれが聞こえないのね」

とそれこそ彼女は嘲けり嗤っている。

毎日毎日この戦さに双方夢中になった。もう残り少なくなるとわれらがしてやると、残った軍勢の背後にいる大将たちは行く手はるかにあるほかの新しい村に援軍を頼むから、あとからあとからどんどん敵の数が増えてくる。

戦いのさなかにリクンナイウンマツは二度も三度もわが悪妹を教え諭したが、いつもいやいやとかぶりを振っている。

## 第7章 シバツカイ村

### 第1章 秘めたる恋心

やがてどこかに向かってわれらが走って行くと、何という郷なのか、その村影がわが眼前に高々とせりあがってきた。リクンナイウンマツはわがすぐそばで刀をふるいながら、また小声をわれにとぼしてこう言うには、

「これこれ、わが君神のごとき勇者よ。わたくしの言葉をよくお聞きくださいませ。ほら行く手に見えているのはその名も有名なシバツカイ村なのです。シバツカイ村は人間だけがいる場所ではありません。天の神から降ろされた村ですから、神ばかりが住んでおり、シバツカイ村を守るために神から住まいや城と一緒に村の中央に降ろされている神の淑女がいるのです。神様だから人間が住む下界のすべてをいつも観察していたのです。戦いばかりがあなたに差し向けられることを本当に不憫に思いつつずっと前から観察してところ、合戦の途中からわたくしがあなたの味方についてたことを巫術で透視し、あなたに白羽の矢をたてました。

いくさを収めてわれらが帰還しようとした時、またわが君の妹御のけしからん行いのせいで、またこのように戦の中でもとくにおそろしいのが立ち上がりました。この戦さはどうしてもシバツカイ村を通るにちがいない。シバツカイウンマツがそう思っていることは手に取る如くわたくしに見透せます。彼女はずっと前からあなたの美しい風貌や武者ぶりを大いに感心していたところ、今彼女の村の方へ向かってあなたがだんだん近くに来ることを見ました。夜も昼も一生懸命あなたを術視していると、神様から神界にも人間界にも美形がたくさんいても、あなたのように器量と剛胆さを兼ね備えたいい男は一人もいませんでした。神女なのだから神の国で嫁ぐべきでありましたが、あなたを見てからは、夫にしたい男はあなた以外に考えられない。あなただけを思っているのですが、妻であるわたくしの憑き神にはとてもかなわない。『二人妻の風習もあるが、リクンナイの人間妻にはとてもかなわない。どうしたら

いいのか』とあれこれ考えほんとうに心をかき乱しています。

神であっても年端もいかぬ少女、今はじめて人に恋した者であるからほんとうに気を滅入らせ落ち込んで鬱々としてこっそり泣いているのです。ほんとうにわたくしは憐れでならないのです。

### 第2節 二人妻の提案

神だから、わけも無くあなたが憎まれることを誠に気の毒に思っていることもわたくしは知っているから、わたくしがいい解決策を提案したならば、シバツカイウンマツは大喜びでわたくしたちに味方すると思います。事実わたくしはこの国土の上で神でも人でもおそれるものは誰もいないのです。シバツカイの神の少女があんなにあなたを想っているのに、神であっても若い男女は同じように考えるものなので、本当にわたくしは可哀想に思うのです。わたくしの方が年上ですから、わたくしから何か言いましょね。わたくしの提案を聞いて直ちに味方についてくれたら、すぐにも喜んでくださいます。たった一人の妹しかいないあなたが、こうもまあ、あなたを手助けする身寄りも親戚もないことを、なおさらわたくしはお気の毒でならない。それゆえシバツカイの女神を第二夫人としたならば、親類をもつことになり、われらは楽しく語らえるでしょう。このたびの合戦はまさか楽なはずはないのですよ。シバツカイの女神が助太刀してくれたならば安心して頼られるのです。わたくしは親切で人によく尽くす女ですから、立派な心を持ってあなたに恋している者を斬り殺すのはいやです。シバツカイの女神をわたくしが怖がっているわけではありません。ただ若い娘の気持ちを憐れに思うのですよ。決して気を悪くしないでくださいましね。心の底からあなたがわたくしを愛してくださっていること、あなたの心裡をわたくしは透視しております。わたくしの方もあなたを心から大事に思っていることを解っていらっしゃいますわね。それ故このわたくしの提案を拙いとお考えならそのようにおっしゃいませ。いいとお考えならそのようにおっしゃいませ」

ただ聞いただけでわれは驚いてしまった。たいして美男なわけでもたいした容姿でもないわれなのに、まるで美男でもあるかの如くクロツベツ女の振り舞いだけでも忘れられないのに、何ということか、村

を守るために神から天から降ろされた女神が、われに同情して気の毒に思っていることは誠にかたじけなく思うが、それらの経緯があるうちに若い女性の情だからわれに恋して、泣きながら気を揉んでいたそうだから、誠にありがたい。リクンナイの女わがいとしい妻は淑女ゆえ、どこまでも神が認めるよい精神正しい規範にのっとった提案をした。なるほど犬の一匹ですら、もはや身寄りが無くなったわれだから、普通の女性の身内であっても嬉しいのに、位の高い神のお身内である女性とそのような関係になることはまことに喜ばしく嬉しい。リクンナイウンマツの立派な裁量をわれがどうして拒否するものかと思ったから、われの考えをリクンナイウンマツ小声で囁いた。妻はただふつうに嬉しがるのならいいのに、ほんとうにいくつもの戯れ言葉たくさんの冗談を返してよこしながら、小声でこっそりわれをほめる声をあげている。

われはひとりでつくづく思い返してみる。どのような顔つきのどんな口つきなのか、シバツカイの女神の考えていることをリクンナイの女わがいとしい妻が巫術で見通したというから、ほんとおどろいた。早くシバツカイの女神を見たいなあ。

やがて話に聞いていたシバツカイ村に近づいた。リクンナイの女わがいとしい妻は軍勢を台にして足を高く上げ、短い呼び声長い呼び声をいりませで喉の奥より高く響くその声がこうあるには、

「これこれ、シバツカイに住む神の妹よ。わたくしが言うからよくお聞きなさいまし。神であるそなたゆえ、悪きことも善きことも皆ことごとく巫術でもって見透せるであります。わたくしも神々のうちにまで幾世代もの昔から今にいたるまで祖先の素性を知られていた村重要な村の出であります。わが悪兄があまりにも愚かすぎて、先祖の遺言を踏みにじり、原因が正しくないものに味方して戦っています。

わたくしは何かみだらな色事めいたことを期待して神のようなお方に味方したのではありません。わたくしが見ると、トミサムベチ・シヌタブカは大昔から今にいたるまで神意に反する悪習神意にもとる気持ちなど少しも持たず、神のおきてだけを忠実に守っている所。人間同士が妬み合っていた昔のことが、今の世になってあらわれたために、またこのよ

うにアトウイヤウンペ悪党の弱虫野郎ほんとに薄ばかな者が戦いの原因を仕掛けた経緯がかくかくしかじかだと、そなたは全てご存知でありましょう。

そなたが平穩に守ってきた村に、わが悪兄が伝言をやって援軍を頼んだことだの、あれこれ矛盾した気持ちこそなたが抱えていることだの、皆ことごとくわたくしは見透しているのです。わたくしは少しも喧嘩をしたくありません。ただ正直な気持ちだけを持っているのです。さあさあ！シバツカイに住む神の妹よ。もう辻褃の合わない気持ちなど捨てて、トミサムベチ・シヌタブカの幼な神、神の御子の背後の守り神として妻の座についてくださいまし。いいあんばいに神界でも人間界でも無い風習ではありません。どこにでもあるのがこの多妻という習慣だから、二人で神のようなお方の相妻になりましょうよ。あのお方がシバツカイ村の村内まで追いかけて来たら、一気に枝葉ばかりか子孫までも残らず全滅させられるのですよ。そなた一人だけが助かったとしても木幣や御神酒をそなたが造ってシバツカイ村の上流から下流まで治めることができるものではありません。トミサムベチ・シヌタブカの貴人と言っても、神以上に、器量においても勇者ぶりも働き振りも、まったく神界にも人間界にもかなうものは誰もいないのです。これほど神のような方これほどのひとに、わたくしがそなたと相妻になったならば、わたくしはそなたにせいっぱいかしずき、そこで初めてわたくしは淑女として幸せになるのでございますよ。どうでしょうか、シバツカイに住む神の妹よ。このわたくしの提案は悪いのか、いいのか。嫌か嫌じゃないか。そなたが承知したら、今すぐ一刻も早く、わたくしのそばまで来てくださいまし」

全くあまりにもわれを褒めすぎ感心しすぎる調子で言ったから、恥ずかしくなった。

### 第3節 相妻承諾

どこかでじっと聞き入っていたものか、リクンナイウンマツが話し終えるやいなや、シバツカイ村の中央に聳える頂上平らなけわしい崖の頂きがパタパタとはためいた。驚いたなあ、どのような生まれのどんな育ちの方に憑く守り神なのだろうか。多くの竜巻数多の旋風がわが戦場の戦闘の上におおいかぶさって来て、天空上では、先に来る雲は矢を射るように槍を投げるようにすうっと一直線に押し寄せ、

後からやってくる雲は拡がる雲の様にゆっくり押し寄せて来る。

人影がわがすぐそばにサッと降りて来た。跳び回っている最中われが見ると、さして大きくない丸い霧の塊がそこにあった。われら二人で濃い霧散らし見たのだが、何度しても人間の姿にして見ることができない。かなり長い間そうやっているうちに霧の中心にわが目の先がさっと届いた。若い娘なのであろうか。神様だから神の面ざしが充分表れている。リクンナイの女わがいとしき妻と同じく、虹を支配する巫女憑き神強い巫女の容姿をしていたが今は詳述を省略する。とにかくいくら褒めても褒めたりないほどの美女だった。

彼女の方からもわれら二人の霧を散らして、悩みながら長い間われらの姿を見ようと努力していたが、恐れ多くてわれらの半顔だけを拝したものの、これほどの神これほどの貴人が、あべこべに何神か何びとかの姿を目撃したのか、目から額にかけての顔色が死人のように青ざめた。慎重深く隅々まで観察し、ただふつうにわれを感心するものであるならいいのに、わが顔をまともに見ず目を伏せている。まだ少女のような娘が遠慮して袖山を噛み噛み、とくにわれのからだを観察していた。リクンナイの女わがいとしき妻は一刻も早くシバツカイの女神に挨拶しよう、われに目配せした。

そうするから、われはまだ少女のような彼女をつかまえてぐっと抱きしめ

「神の女人よ。かたじけない。そなたは神ゆえ、わが心情だの戦さ沙汰の原因だのを知っているから、われらを助けに駆けつけてくれたこと誠にありがたく思っている」

と言って彼女を撫でさすった。

リクンナイの妻も跳んできて「神の妹よ」と言って若い娘の頭を何度も丁寧にさすった。若い娘はわれの無事を喜び、「お兄さま」と言ってわが衣の両裾端をかき寄せた。かわるがわる挨拶儀礼を交わし、二度も三度もていねいな言葉を交わし合った。

さてそれから、三人肩をならべて軍勢のかたわらに駆けて行った。シバツカイ村のは大騒ぎになり、たくさんの武具の摩擦する音いくつもの鎧のざわめく音が高まり起こる。大勢の者のたくさんの軍列数々の部隊が踏む合い押し合いする。

リクンナイウンベは

「アチカラ！アヤカンナ！わが悪妹のちくしょうめ。どこまでわれを悲しませ無礼なふるまいをするのか。縁もゆかりもない小陸人くされ陸人、そんな奴に惚れくさって、いちやつきあっていやがる。その上えらそうに妻の座にも納まった。うまい具合にシバツカイウンマツも自分の方に味方させるために術でそういう気持ちにさせたのか？小陸人の妖魔の顔淫魔の姿、見た目だけで人を感心させる者と相妻になると言うのか？」

と数々の悪口ぶちまけ悪態をついた。二人の若い娘は大笑いする。

クロツベツウンベは、妻一わが妹もわれが奪い取ってしまったものだから、本当に淋しがっている。ざまあみろ！

アトウイヤウンペが、いつも弱虫だとリクンナイウンクルから軽んじられているのは、まことにいい気味だ。

大勢の者がカーッペッペツと唾を吐きながら

「アチカラタ、アヤカンナタ！シバツカイの神と称する女も、淫欲に夢中になって恋狂いして小陸人、見た目だけで人を感心させる者に惚れくさったものだから敵の味方についた。これが神として敬われていた者の振る舞うさまか。さあさあ、早く二人とも殺してしまえ。たたっ斬ってしまえ」

と声を励し合っている。そうすると二人の若い娘は、こんなに悪口を言われても少しも怒りもせずに、

「このような立派な勇者とわれらが相妻になったから、われらを妬む者たちからどのように悪く言われようと痛くも痒くもあるもんか。悪く言われると逆に嬉しいのよ。さあさあ、もっともっと悪口を言って幸福になりなさい」

と爆笑した。敵の巫女たちはいまいまして、ますます激怒する。

おおあわれ、もはや身寄り無しのひとり者であるわれは、皆にやっかまれ、われを憎む者ばかりがあとからあとからどんどん増えてきて戦わねばならないのだからなあ。二人の若い娘たちがそばについてくれなかったなら、この戦さにたった独りでだけで立ち向かうことができただろうか。幸い二人の若い娘がわれに同情してくれて、きつい戦さもゆるい戦さもわれと一緒に苦勞を分かち合ってくれるお蔭で、

その庇護をわが戦力にして戦うことができるのだから、大泣きしてしまいたい気持ちになった。それほど二人の若い娘にわれは感謝している。

さあさあ、また戦さが終わったならば、二人の若い娘を溺愛して充分感謝の意を尽くしたいなあとわれは思うから、戦いであるはずなのに気持ちがうきうきしてくる。

#### 第4節 鮭獲って腹ごしらえ

そのうちあまりにも空腹で死にそうに思った。見れば遙か遠いきれいな小川の流れ下る川面が明るく輝いていた。もしやあのきれいな小川に何か魚でもいるかなと思い、急に魚に期待をかけた。それゆえわが相妻たちに気づかれぬよう、わが身体を包む靄だけをわれが戦ってように作り替え、靄の中からわが身だけすいと抜け出して、この小川の川原に音せぬようにこっそり行った。

見ると、まさかまたそうだとは思わなかったのに、ほんとに美味そうな夏鮭が下の群が底の砂に摩れ、上の群が日光に焦げている。丁度いい具合に小槍を造り、われは川上へ川下へと魚を追い大量の夏鮭を岸に積み揚げた。川端の木原の間を走り、折れやすい木をポキポキ折って、薪を二かかえも三かかえも運んできて川原に積みあげた。それから早燧をきって手早く大きい焚き火を燃え上がらせ、美味そうな魚を選んでたくさんの焼串を立てた。相妻たちに土産にしようと思って、焼き串の大半を火に向け、よく焼けたのは別に立てておいた。

われがここで食べるものをざっと火に炙った。われは焚き火の周りに足をへの字に曲げて投げ出し、まだ生焼けの焼き串を頭の方からむしって、身をよく噛んで食べた。なんとまあ獲れたての魚は美味かっただろうか。いい気持ちになった。わが口のまわりにはたくさんの血の枝川いくつもの血の枝川が滴り落ちている。

われがた身代わりの靄は、あたかも本当にわれが戦っているかのように戦場の真上であちこち浮かんでいる。相妻たちはずっとわれだと思っているらしく、わが靄のすぐそばで、刀影のみピカピカ閃かせながら笑い声物言う声を高く響かせていた。われは可笑しくて、一人でクックツと忍び笑いしながら、食事とわれが自称するものに、顔をあち向けこち向けしながら行儀悪く食べていた。

そのうちわが戦場に音が鳴り轟いた。どうしたことなのか、急にわれの魂がびくびくおびえ、今にも何かわれを突き殺しわれを斬り殺しそうに思われた。と同時に突然何者かが笑いながら両手をうち叩き、たった今わがすぐそばにすうとやってきた。われは非常に驚いたものだから、眼が二つの星のようにキラキラしている。

見ると、まさかわれが見るとは思わなかったのに、たった今の今まで戦闘音がおびただしく聞こえていたのに、わが相妻たちはどうやらいぶん長い間さつきからわれの真後ろにいて、われが食べる姿を可笑しくてしかたないのを我慢して見物していたのであった。

われへのお返しに、さきほどの戦場の音は身代わり靄が戦っていた音であった。本当にわれは驚き少し恥かしかった。二人の若い娘は異口同音に

「真似ごとばかりのつまらぬ巫道くだらぬ巫道をしている妾たちでしたが、ほんのちょっと油断していた隙に、神のようなお方は靈威ありあまるのか、何とまあ、わが君のすることは情けなくて呆れてしまいますわ。貴方が戦っているとばかり思って、おしゃべりしながら貴方の周りで戦っていても返事がない。本当に変だから二人で霊視して見ると、どうやらずっと上皮一枚だけの空の靄へ話しかけていたのです。本当に口惜しかったわ。それでわたしたちも仕返しにちょっとした悪戯をしてあげたら、可笑しくてしかたなかったことよ」

と今にも笑い死にしそうに笑いこけ、

「神のごとき勇者よ。何という気味が悪い食べ方をしていること。よく炙って食べたらいちばん美味しいのに、生焼けを食べて食あたりしたら、どう戦うおつもり？」

とあてこすった。われは首から上が見えなくなるほど二人の若い娘に何度も何度も深くうなずいてみせ、両方に腕を回してつかまえ、頭の上に手を伸ばして二人を何度も撫でさすり、神々しい顔に何度も接吻した。「さあ、ほらここにわがいとしい妻たちの土産にしようとして、獲ったうちで美味しそうな魚ばかりをよく焼いて炙ってあるよ。いっぱい食べて元気をつけなさい」

とわれが言えば、二人は小手打ちたたいて豊漁を喜び、充分焼けた魚の焼き串をそれぞれ手にとって額

の高さまで押しいただき、下へさげて押しいただく  
拝礼をしてから食べた。

「神のごときわが君様のよき獲物をまさか戦さの最  
中に食べて元気をつけるとは思わなかったのに」  
と皆で舌鼓打ちながら食べに食べた。『早くまた戦い  
がおわったならば、わが館でゆっくり山獵に行つて  
妻たちに美味い獲物を食べさせて喜ばせてあげたい  
なあ』と思いながら、二人が食べる様子をにこにこ  
しながら眺めていた。一同食べに食べ、満腹して腹  
が俵のように膨れた。

## 第5節 戦闘再開

われが突然力いっぱい天空上に高く飛び上がると、  
神が造りし天の国が粉々に砕け散るかのような噴火  
音を立てた。多くの竜巻数多の旋風がわれの前に巻  
き上がる。竜巻の先端から大粒の霰、大粒の雨が降  
ってきて、地べたのおもてを剥がしていく。ひどい  
土埃、ひどい草の葉っぱをわれがパッと散らすと烈  
しい吹雪のつむじ風となって吹き上がり、戦闘の上  
に降り注ぐ。いつものとおり大勢の者が竜巻の前に  
吹き上がり、枯葉が吹き上がるそれさながらに、空  
の涯までクルクル回っていく。

わが後方では二人の若い娘が非常にびっくりして  
立ち上がり、

「びっくりしたなあもう、わが君様の動き回る音と  
きたら！」

と軽いイムや強いイムを発し、大きな焼き串を両手  
に持ったまま、笑う声物言う声が交差する。心の奥  
でひそかにおかしがりながら、軍勢の傍らにわれは  
降り立った。

リクンナイウンベやその他大勢の者が目を瞠って  
わが身体をじっと見つめ、

「おや、これはこれは！ 小陸人くされ陸人やくされ  
女たちが、いつものようにわが軍を斬りまくってい  
る音だと思っていたのに、何とまあ、小陸人が動き  
回っていた音だったのか。びっくりさせられたなあ」  
と言っている。わが妻たちが焼き串を手を持って、  
脂がのった魚の脂を滴らせて食べながら戦場を跳び  
回っている。その様を大勢の者が見て、なおさら自  
分の鼻や口の前に拳をあてて驚いた声をあげ、めい  
っぱいの怒号をぶちまけている。心の奥でわれはお  
かしがっていた。同じようにまた妻たちも爆笑しな  
がらこれなる戦いを再開した。大勢の者が氣勢をあ

げて奮い立つ。

勇者がたくさんいる村であるから、われがあんな  
にも斬ったのに、殺しても殺しても、あとからあと  
からどんどん敵が増えてくる。何人かが斬られて何  
人かが殺された。二人の若い娘のしわざなのか、た  
だ刀影のみピカピカ閃いて見えるだけ。跳び回っ  
ている最中であつたが、われが見ると、刀を執つても  
美貌においてもどちらの妻に優劣がつけられるだろ  
うか。それこそ同等の霊力、同じくらの美貌と胆  
力ではあるが、よくよく見調べると、どうあつても  
刀を執つても戦いぶりも美貌においてもリクンナイ  
の女わが本妻が群を抜いている。

リクンナイウンベは、

「さあさあ、勇者たち族長たちよ。小陸人くされ陸人  
は、たった一人の小童にすぎない、たった一人の男  
でありますぞ。早く斬つてしまえ。突き殺してしま  
え」

と大声で下知している。

槍を持つ組は尖鋭な一団となり、太刀を持つ一団は  
風に舞う木の葉のようにバラバラとわれらへ向つて  
突進した。われは槍もろともに叩つ斬り、太刀もろ  
ともにぶつた斬り、われが刀をふるった者はわが身  
体面に散り乱れる。

敵のやや遠いやつはわが上体を長く伸ばして斬つ  
て棄て、近づいた敵はわがわきの下に斬つておとす。  
右手側でわれが太刀で斬つた者の上半身は低く垂れ  
こめた霧のように俺の刀で血煙をあげ、下半身はぶ  
つ散らかした敷物のようにわが後にバタバタ倒れて  
いく。

遠くから放たれた矢は、薄造りの上等な兜のおも  
てに大きな綿雪のようにゆるく落ちてきて、近くか  
ら飛んでくる矢は大粒の霰のように落ちてきて、兜  
の表面に降り注ぐ音がカツンカツン、チャリンチャ  
リン。

たくさんの矢狭間いくつもの矢狭間をわれは身を  
ひるがえし、左手で撃つた者は死んだ魚がビシヤッ  
と落ち潰れるそれさながらに潰れる。それと同時に  
わが憑き神はたくさんの堅い音幾つもの固い音をわ  
が頭上に響かせる。

クロッベツの女はたくさんの泣きの涙にかきくれ  
ている。われは腹の中でひそかに嗤った。

われが空中に力いっぱい跳び上がると、それと共

に空中がバリバリ裂けビリビリ破れるかのように、わが憑き神たちが、次第次第に<sup>あまた</sup>数多の轟音を国土の底に鳴りとどろかせる。

リクンナイの奴は今まで何回も同じ経験していたのに、改めてわが憑き神の音やわが働き振りをさんざん聞いたり見たりして肝をつぶし、とうとう<sup>くび</sup>頸骨の上から消えたみたいに深くうなだれた。濃い憂いの色深い悲しみの色を顔の<sup>おもて</sup>面に沈ませている。

いかなる理由で、リクンナイウンベこれほど神のようなひとが、愚かな悪人たちに同調して、ずいぶん長い間、戦さのさなかに、たとえ言葉だけであったにせよ、まったくひどいことをわれに言っただけにせよ、まったくひどいことをわれに言っただけにせよ、あんなにも自分ほどの勇士はいないと自慢していた者が、何か悲しみにうちひしがれ心配しているようすだから、われは猛烈に腹が立ち、手の甲の血管がプクップクッと盛り上がる。

今はもう雑兵どもも残り少なくなってしまった。これなる戦さは追撃戦となり、われらは怒濤のように押し進む。

アトゥイヤの、ポンモシリの、クロッベツの三人は、今はもう、水に長くつかってふやけた昆布そっくりに顔色も失せ、からだじゅうをブルブル震わせているのがよくわかった。

そもそもアトゥイヤの奴が最初にきっかけをつくった。一番口惜しいのは、まだ背負われるほどの童、背負われるほどの赤児であるわれに、とんでもない言いがかりをつけて挑戦し、馬鹿にして襲撃し、<sup>レブンクル</sup>沖の島人の島々までわれに追撃させたことだ。これら一連の経緯やわが悪妹のちくしょうに協力したことや、いろいろあぶない目にあったことを思い返し、アトゥイヤウンペの意気地ない振る舞いざまを思い出すと、狂うがごとくわが心は意識朦朧となる。わが見るところ物が二重三重に見えて行って、とうとう本当にどうしたのだろうか。わが心とぎれとぎれになり、ぼうっとなってしまった。長い間なのか短い間なのか、わが心は解けがたくもつれる。

## 第6節 報復の仕方

そうして、どれほどたった時にかわれは気がついた。見ると、どこにまあ森や山があったのだろうか。何から何まで<sup>じなら</sup>地均したようにすっかり平らになっていた。たくさんの人家や林だのといっしょ

に、焼けこげた柱がずらっと立ち並んでいる。高い山低い山が崩れ落ちてまだ土煙が上がっている。海辺の崖と海にはさまれた狭い砂浜で、われは長々と伸びている状態で正気にもどった。

われは、何かを右手と左手に持って<sup>あた</sup>辺りにぶつけていた。見ると、まさかまたそうとは思わなかったのに、リクンナイウンクルとアトゥイヤウンペの<sup>くび</sup>首級を辺りに叩きつけているのであった。

うれしくなって、細枝がパツと撥ね起きるみたいにわれは起き上がった。口元に笑みを浮かべながら、首級をあちらへ、こちらへわれが蹴飛ばすと、ムクの根が転がるさながらにコロコロ転がる。

われの高笑いが響きわたる。

「これこれ、リクンナイウンクルわが<sup>シウトニシバ</sup>舅殿よ。さあ、よくご覧あれ。今こそ<sup>ボンヤウンベ</sup>小陸人まだ背負われるほどの童背負われている赤児みたいな男の憑き神の働き振り強勇振りをそなたは見るがいい。人も羨む<sup>たぐい</sup>類まれなる勇者たちが、これを欲しくて、われを理由も無く殺そうとばかりしていたのだから、汝らの呆れたざまは何て立派だったこと。どんなにかまあ、神の国に行ったら、今の今までそなたらがした立派な行いでもって褒められるでありますよ。

リクンナイウンクルわが<sup>シウトニシバ</sup>妻の兄殿、これほど神のごとき人が、正しい行いをしていたならば、われは大切にして孝養をつくすけれども、あまりにも汝に感謝しすぎるゆえ、このとおりささやかな返礼をいたしますよ。このお返しをしても、まだ<sup>うまざけ</sup>旨酒に酔いしれていてまだ飲み足りないなら、再びまた<sup>ウタサロンキ</sup>立ち合いをしてその時こそは真のお返しをいたすつもりですぞ。われが今汝らにしたことは、ほんのお遊びでありますぞ」とわれは怒号した。

われはアトゥイヤウンペに向かって、

「チョパラタ(ざまあ見ろ、好い気味だ)! 大したことない弱虫野郎め。なんとまあ、お前の格好のいいこと。お前のような者が二百回ぐらいかかって来てもわれはおそれない。お前には一番感謝しているから、まず最初にささやかなお返しをするぞ。覚悟はいいか」とわれは言って、わが太刀の鞘をサツとうち払い、<sup>くび</sup>首級を真ん中から斬り裂いた。

斬り裂いた頭の半分を<sup>アトゥイ</sup>海の<sup>コシンブク</sup>妖魔、<sup>ルル</sup>潮の<sup>コシンブク</sup>妖魔にくれてやると言葉をつけて、<sup>レブンクル</sup>沖の島人の海と<sup>レブンクル</sup>本島人の海が接する所へ投げ棄てた。残る頭の半分は<sup>イワ</sup>山の妖

魔や草の妖魔の媚にしてやる。リクンナイびとも同じ様に始末し終え、ここにおいてやっと安堵した。

われに喧嘩をふっかけ、われをそねむ者の総大将を今こそわが手で罰した。奴らがわが太刀で命を落としたことで、まことにうっぶんが晴れた。ざまあ見ろ！好い気味だ！

ささやかなお返しをしても、われはかすり傷すら負っていない。われは倒木に腰掛けた。ようやく今になっていささか疲れを感じた。

## 第7節 避難した相妻たち

こうしている間二人の若い娘はどこに行ってしまったのか見つからない。戦さの狂気戦いの狂気に取り憑かれて正気を失っていたから何も気がつかずにぼんやりしていた。ひょっとして相妻たちも、術に惑わされてどこかに行かせられたのかと思ったら、急に心配になってきた。

倒木の上で休みながら、密かに辺りをくまなく探していたところ、道の遙かかなたに人影が忽然と出現して、われの方へまっしぐら。わがすぐそばにストーンと落ちて、われをぎっちりつかみ両側から抱きしめた。

見ると、おおあわれ、ああ可哀想に。相妻たちはずいぶん前からあまりにも疲れているものだから、二人とも脂汗をかいている。それがなおさら異彩を放つ顔、以前とは別な美しい姿をしてまるで神のようだ。

二人はににこにこ笑いながら、異口同音にこう言った。

「本当にまあ神のごときわが君様の憑き神の仕業ときたら。戦さの狂気に取り憑かれていたせいなのか、全く驚いたわあ。おそろしや恐ろしや。たいしたことがない憑き神を持つわたくしたちだから、せめて一人でも多く斬ってあなたに手助けしようとする、もう少しでわれらのつまらぬ体が今にも斬り殺されそうになったものだから、ずいぶん長い間、あちこち隠れ逃げてばかり。それを悩んでいるうちに、やっと戦さが終わって空がぱっとうち晴れたように思われたから、われらは姿を現してやって来たのですよ」

われは、妻たちの遭難を苦笑いして聞いた。そして

「わが行いのせいで年端もいかぬ若き娘たちを戦さ

の最中に、生涯の汚名を着せ、生き恥をかかせたことをなおいっそう気の毒に思う」

と言い、

「本当にそなたらがいたお蔭でわれが無事蘇生できたことを誠に感謝している」

と言って二人を撫でさすった。二人の若い娘は泣きながらかぶりを振り、からだをもじもじさせ、かしまりながらもまた異口同音に、

「いえいえ、とんでもない。トミサムベチ・シヌタプカの幼な神、神の御子よ。悪い奴らしくされ野郎たちから、どんなに悪し様に言われても、少しもわれらは腹が立たない。かえって神のようなお方に大事に思われ可愛がられるのですもの。わたくしたちのほうこそ、自分たちのせいで、神のごときお方が悪い渾名で呼ばれ怒鳴られ、悪者みたいに悪く言われて、わたくしどもは恐縮していたのです」

と言うから、われのほうも

「まったくまったく。神のような女人たちのせいで、他人からどんなに悪口を言われ、侮辱を与えられても少しも気にしない。ますます神のような女人たちが愛おしくなり、わが命のように本当に大事で可愛くてしょうがない。そなたたちの庇護を戦力にしていたおかげでこのような働きができたのです」

と言えば、二人の若い娘は力が力なく萎草のようにわが腕の中にくずおれ、「愛しの君」と「大切なお方」と言って二人で何度もわれを撫でさすり、代わるがわる皆で無事を慶ぶ踏舞をした。二人の若い娘をわれは何度も撫でさすり神々しいお顔に幾度も接吻した。

## 第8節 実妹の悪態

リクンナイの女わが妻の足首に結んだわが悪妹はあいかわらずかすり傷ひとつ負わず神のような有様でいる。リクンナイウンマツがこう言った。

「これこれ、本島人の淑女、わが義妹よ。いかがでしょうか、もっともっとそなたの夫クロツベツウンベにそなたが協力したことを何とかあやまってくださいな。そうしたら、もう解いてあげるわよ」

すると、わが悪妹あの最低な奴は、下顎をつんとしゃくりあげそっぽを向き、こんな怒号を跳ばしてきた。「ああ嫌だ、汚らわしい。リクンナイの女独りとかそ兄者のあんちくしょうがいちゃつきあうだけでも腹立たしかったのに、今はシバッカイの女がこし

やくにも神と称する者のくせに恋に狂って、あたしの愛しくそ兄者に惚れて味方し、今は二人ともくそ兄者といちゃいちゃしてるなんて。

わがくそ兄者の最低な奴があたしを相手にしないなら、何のためにあたしが生きているのか。少しでも早く佩く太刀の刃先であたしを斬り殺してくれたら、それだけでも死後の誇りにして安心できるのに」とそっぽを向いた。おおあわれな。本当にまあ、どこまでも悪妹あの最低な奴はわれを辱めるから、もう少しで叩っ斬り、ぶっ殺してやろうと考えたのだが、リクンナイの女わが愛しい妻に委ねたものをわれの勝手にすることができない。それでわれは聞こえないふりをしていた。心の中ではどうにもこうにもしようがないと諦めていた。シバツカイの神女は今初めて聞いたものだから本当におどろきもし、また痛ましい思いをしているらしく思われた。われも神の相妻に恐縮している。

リクンナイの女わが妻は何かしてわが悪妹、この大怪物極悪の人間のいのちを助けたくて、今まで何回もわが悪妹を教諭しても尚も言うことをきかないばかりか、ひどい侮辱の言葉を口走ったから、ただふつうに忌々しく思うのであればいいのに、後ろへ振り向いてさんさんと涙を流している。シバツカイの神女はわれに同情していた。

「これこれ、わが妻たちよ。さあ、今こそ戦さを取めて、トミサムベチ・シヌタプカのわが館へ帰還しようぞ。あの極悪の神極悪の貴人を一刻も早く島の出入り口に捨てなさい」

とわれは言って天空高く飛び上がった。二人の若い娘もわが両側で走っている。疾走する神風その神風の先に軽々と持ち上げられた。その耳元に風がうずまき起こる。こんなに早くわれが疾走するのに、二人はわれを何度も追い越す。飛んでいる途中、口にまかせて有ること無いこと虚実とりまぜておしゃべりした。聞きながらわれはオウとかフムとか合いの手を入れている。

## 第8章 再びシヌタプカへ

### 第1節 一夫二妻宣言

上陸すると、いつものとおりトミサムベチ・シヌタプカの聖なる頂上平らなけわしい山が山頂を天空高く揺らして、山の中腹まで黒い靄、もわっと

濃い霞が棚引いている。外の物見櫓の上にはわれらは降りた。二人の若い娘はわが居城を見て、ただ普通に畏まるのならいいのに、外庭に座り、頭を深く垂れてもじもじしている。

その間に、今初めてわが居城をじっくりと眺めた。ゆったりと歩を進め、城の外でわが刀鐔が高く澄んだ快い音を立てた。あちこち歩き回り、わが口元に笑みが浮かぶ。いつものごとく山城に当たる風はパタパタとはためき、地面に当たる風は轟々と鳴りとどろいている。まったく好ましく心が動かされる。

さてそれから、わが妻たちに館に入るよう言いながら、われは入り口の土間に向かう。神の匂い財宝の香りが強風のようにわれをたじたじと後ずさりさせた。母屋入り口の金の簾が光り輝いている。われは簾に手をかけふうわりと揺らして、内土間に光を放つもやに身を包まれてズイッと入っていった。見れば神の館はかなり長い間炉が焚かれていないものだから、館じゅうが荒涼としていて、白い靄黒い靄が館じゅうに充ちていた。われは左座を通り、造りつけの台座に腰掛けた。わが妻たちは慎み深く入り口の敷居を跨いで入ってきて、内土間に座った。ただふつうにわが館内部を感心するのならいいのに、非常に感嘆し、畏まって顔を挙げることもしかねている。

そのようだからわが声を美しく響かせて言った。「これこれ、わが妻たち神のごとき方々よ。われが口に出さなくてもわが心裡はお見透しであろうが、われが言いたかったことは、やはりあえて話すことにしよう。

どのような生まれのどんな育ちのわれであるとして、幼い頃からこれまでの生涯人々にやっかまれ憎まれて暮らしていたこと、そなたらは淑女ゆえ、神々のしきたりをよく心得ているから、悪きことも善きこともその原因を知って、驚いたことに、われを助けに駆けつけてくれた。そのおかげで本当にわれが何度も何度も言うように、そなたたちのおかげでわれは蘇生し、かすり傷ひとつ負わずに、わが館の懐に帰り着けたこと、誠にそなたたちがいたお陰なのであるから、本当にありがたく思っているのであります。

今はすっかり疲れたので、これからゆっくりと皆で楽しく語らいながら休みたい。休んで元気を回復

したならば、その後、いささかの酒を醸して神々にまで聞かせるつもりなので、今は少しだけ言うておこう。

戦いの半ばで、まだ赤児みたいな者であるわれが無力なせいで、尋常ならざる浅ましい格好で殺されると、リクンナイの女わが愛しい妻がいのちを助け、もう少しで危うくわれが死ぬところだったのを、強い憑き神を持つリクンナイの至高の巫女が蘇生してくださったことをどこまでも忘れられない。特に、いちばん先にわれに助太刀してくれたお陰でわれは生き返った。

それゆえ族長階級の風習や神々のしきたりにもあることだから、固めの儀式をして結婚する時に、リクンナイウンマツわが愛しい女は右座を定席とする本妻としてわれが仕えるつもりであります。これはほんとうに大事な決まり事なのだから、しっかりそのように心得てほしい。それからシバツカイの神の女人もリクンナイウンマツの傍らで第二妻として持つことにします。われらの煮炊きをしていただきます。われには、それなりの理由があることをそなたたちが承知したとあるならば誠にいいのです。われは、本妻と第二妻に上下の差をつけるとは考えていない。本当に全く両方とも同じくらい、心臓の先に入れるほど大切に可愛いのですぞ。悪く思わずに、しっかり仲良くしてください。

今日からリクンナイウンマツは右座に座って、夜は父祖代々の母が使った寝床に寝てゆっくり眠ってください。シバツカイウンマツ神の女人は第二妻だから左座に座り、左座にある部屋でぐっすり眠ってください。今から、わが館はそなたたちが落ち着いて住む家なのです。それゆえ少しも遠慮しないで、何でも自由に使ってください。この屋敷内にあるものは何でも皆全部そなたらの持ち物なのでありますぞ」

と、二人にしっかり教えたところ、なんとまあ聞きわけがよかったろうか。二人ともわれが言い終える前に立ちあがり、リクンナイウンマツは右座に来て、シバツカイウンマツは左座に来て炉端に座った。

## 第2節 リクンナイ女の決断

リクンナイウンマツは自分の足首からわが悪妹の縛りを解き、肌着一枚だけを着せて炉の下座に立つ金の柱にしっかり縛りつけた。その上でこう言った。

「これこれ、神の妹よ。わたくしの言葉をよく聞きなさい。かわいそうにこれほど神のような方これほどの貴人がそなたなのに、何か魔神に化かされていたせいなのか、どこまでもわたくしの言うことをきかないでずいぶん長い間そうしていたものですね。

さあ早く悪行を悔い改めなさい。今父祖代々住んで来た山城、生まれ故郷の城の中で、見えぬ所で何でも見ている神々の目の前で、先祖の戒め、神の戒めを与えて、それでも悪かったと謝らないならば、わたくしはもう降参しです。それゆえ、わたくしは神の掟に忠実に従って、わたくしの太刀の刃先でそなたは命を落とすでしょう。神の腕の中にそなたの魂を送ったならば、神からそなたに死罪を与えられるでしょう」

とそれこそたくさんのよき事柄を教え諭した。われが目の隅から見ると、わが不肖の妹は相変わらず、あちらへこちらへ顎をそむけながら、やはりいつものように悪口雑言をぶちまけた。

どうしてもほんの少しでも言うことを聞くものではないと最初からわれは思っていたから、今はもうリクンナイの女がただ疲れ果て一人で思い煩っていることだけが気の毒だった。

## 第3節 煮え湯の裁き

そのうち造りつけの台座の上でわれは着替えをした。その台座に座って、薄くかける靄に身を包まれていた。

リクンナイの女は心をこめた煮炊きにかいがいしく立ち働く。シバツカイの神女は二抱えの薪、三抱えの薪を積みあげるほど運びこみ、炉火の真ん中をよく燃えるようかき立て、床を遠くあおぎ近くあおいで掃き掃除した。館の中が明るく輝く。

リクンナイの女は、よき食べ物大きな高盛飯を慎み深く自分の頭のとっぺんまで恭しくあげ持ってわれに捧げた。われは受け取って高くかざし低くかざして拝礼してから食べた。あまりにも空腹で今にも死にそうに思っていたから、よき食べ物でわが心臓のすみずみまで伸び伸びとした。今初めてリクンナイウンマツの心をこめた料理を食べた。なんとまあ煮炊きが上手くうまかったらうか。われは舌鼓を打って食べた。二人の若い娘にしてもずいぶん長い間食べていないものだから本当に空腹だったらしく、それぞれ大きな高盛飯を自分の前に置いて食べ

ている。われらは食べ終えた。

食事の最後にリクンナイの女は大鍋で重湯<sup>おもゆ</sup>状になった寄せ煮粥<sup>テッテリ</sup>を作った。杓子や篋<sup>しやくし</sup>でわが悪妹<sup>へら</sup>にびたびた塗りつけると、痛いのか縄目から頸をのけぞらせている。毎日後悔しているか尋ねてもそっぽを向き向きしていたあげく、とうとう悶死して白骨が縄目にひっかかっている。リクンナイの女はそれを見るやいなやカッと怒りが勃発し、懐剣がズバッと鳴る。ちぎれた断片が左右へさっと散り、死にゆく魂の天に昇って行く音がゴロゴロ鳴り轟く。天空上で東へ西へ行くにも行けず、二度も三度も行きつ戻りつしたあげく、魂が再生する東に向きを変えて行き、再生する神となつて、島<sup>モシリ</sup>の山頂からどこかの島の山頂へ音を立てて行く。雷鳴が去った後に空がぱっと晴れた。

ただ聞いただけ見るだけをしたのだが、われは驚いてしまった。本当にまあわが不肖の妹あの最低な奴の憑き神がしたことに驚きと同時に猛烈に腹が立ってきた。ただ白骨だけが縄目にひっかかっているだけのように見え、ずいぶん前から神々から罰せられているとばかり思っていたのに、まだ憑き神の鳴動する音がしたから、本当に強靱な魔神が憑いている者であったことがわかった。リクンナイウンマツも非常に驚いたものものだから、しばらく刀を上の方にあげたまま、身動きもせずじっと立っていてから刀を鞘に収めた。

たまげて裏返った声が聞こえてきて、

「あのように罰したというのに、まったくどこまでも妾<sup>わらわ</sup>の言うことをきかないことってあるかしら。何とか後悔し謝ったなら、一族となつてわが君様を神々と共に喜ばせたいから、腹が立っても我慢して一人で思い悩んでいた。本当にわが君様が言ったように、妾<sup>わらわ</sup>少しも役にも立たないことをしたようだったわ」

と悔し涙をひとりで流している。シバツカイウンマツはただふつうに痛ましく思うのならいいのに、大いに気の毒がってたくさんの慰め言葉をリクンナイウンマツに言い聞かせた。われも同じように彼女を宥めすかしたから、今はもう勝手にしると諦めて、また三人で楽しく語り合った。

#### 第4節 一夫二妻の日常

今はもうすっかり元気になった。同じ様にまたわ

が相妻たちもすっかり元気を快復したことがわかった。毎日毎日かわるがわる心をこめた煮炊きをしてわれに捧げた。なんとまあ二人とも煮炊きが上手であつただろうか、本当においしい物をいただきながら、われは刀鞘の彫り物や鞘の外側の彫刻に熱中した。驚いたなあ、なんとまあわれの腕は確かであつたことか。みずから彫った物ではあるが、まことに面白い。たくさんの美しい形いくつもの紋様がぐりりと連なり、その上一帯に霊なる光がピカピカ閃いていた。

リクンナイウンマツは持参した嫁入り道具の物入れに手を入れ、絹を取り出して二人で分け合つて毎日向かい合つた席で刺しゅうをした。二人は手芸においても優劣がつけがたい。その刺繍は、たくさんの神々しい雲となつて立ち昇る。しかし、やはりよく見ると、リクンナイウンマツが手仕事においても群を抜いていた。本当にまあ普通の人間の若い女性が、巫術においても働き振りにおいても美貌においても何でも神女より優れていることに本当に驚いた。なんとまあ二人とも仲良く話していたことであろうか。毎日毎日向かい合つて刺しゅうの針を運びながらおしゃべりして笑っている。その合間にも代わるがわる刺繍を見せ合つては代わるがわる褒め合っている。毎日われらは楽しく語らつて暮らした。

#### 第5節 再び鹿狩り

ある日のこと、台座から立ち上がつてわれは身支度した。負繩かけた矢筒をわが背にパッと投げあげ、桜皮をまいた弓の握りの真ん中をわれはむずとつかんだ。われがそうすれば、わが相妻たちがいつせいにじっと見つめる。そのようだから、われは首から上が見えなくなるほど二人へ何度も何度もうなずいてみせて、

「これこれ、相妻たちよ。せめて今だけでも山獺に行つて、狐でも小兎一匹でも捕つて来て食べさせてやるぞ」

と言えば、二人は顔を見合わせ大喜びしている。その様子をわれはちょっと見て、天井の煙出し穴を通り抜け、天空高く飛び上がり、ただひと飛びにトミサンベチの遠いみなかみへ音をたてて行つた。

行つてすぐに大牡鹿にわれは遭遇した。獲つた牡鹿を剥いで見ると、まことに鹿はよく肥えていて、どこもかしこも脂身の塊だ。どんなにかまあ、また

相妻たちが喜ぶにちがいないと思ってわれは忍び笑いしながら剥いでいた。

この前われが山獵で大牡鹿を捕ったとき、アトゥイヤウンペが挑戦してきた経緯や、わが悪妹に極悪の神が取り憑いてどこまでもわれをからかい<sup>なぶ</sup>つたことを思い出すと、本当にくやしい気持ちが込み上げてくる。今こそ初めて人目がない所にいるものだから、声もなくはらはらと涙をわれは流した。男きょうだいも身寄りもないわれのたった一人の実妹なので、あんなにも可愛がっていたのに、なにゆえ同じ母から生まれた者同士のわれらなのに、妹はわれにあのようなとんでもない気持ち抱いたのか。妖魔に憑かれ罰あたりなことをしそだったのだと思ったら、ほんとうに恥ずかしい。

リクンナイウンマツやシバツカイウンマツは淑女の精神、正しい心を持っているから、悪きことも善きこともみごとな判断ができるのに、わが悪妹がわれに恥をかかせたが、ちょうどいいあんばいに神の相妻たちがわれに同情しわれを慕ってくれたお蔭で毎日愉快地暮らしていけることはほんとに嬉しい。いろいろなことをわれが思い出して、時には顔面に涙が滝のように流れ落ち、時にはにこにこしながら、今剥ぎを終えた。

大鹿を子供のように軽々とわが背に投げあげ、再びトミサムベチ・シヌタプカへ音をたてて帰った。窓の内側に大鹿をドサリとわれが投げ降ろすと、わが相妻たちは豊獵の舞いや踊りを踊って、小手打ちたたいて喜び迎え、われをねぎらった。

まず<sup>フイベ</sup>肝臓を切り分け、炉にいらっしゃる火の神さまに食べていただいた。大きな高盛りをリクンナイの女わが本妻に捧げた。彼女は腰を深くかがめて受け取り、低くかざし高くかざしてそれに拝礼した。同じ様にまた高盛りをシバツカイの神の女人に捧げると、彼女は腰を深くかがめて高くかざし低くかざしてそれに拝礼してから自分の前に置いた。われも大きな高盛りを自分に捧げる。

大鍋に水を入れて<sup>かぎ</sup>炉鉤に掛けた。<sup>しろみ</sup>脂身たっぷりの肉、白身の脂の部分<sup>しろみ</sup>を鍋の中へぶつ切りして入れた。炉端で今初めて新しい獲物の新鮮な<sup>ヨシベ</sup>胃袋を食べた。なんと美味かっただろうか。まことに旨い。相妻たちはたくさんの冗談を交わしながら、

「わが君様のりっぱな獲物のおいしいこと」

と舌鼓を打って食べている。

鍋の中の肉がゆで上がった。大きな<sup>くり</sup>剥り鉢を取り出し、われは肉やしろみを鍋からあげ、高盛りを三個つくって一個は自分の前に置いた。二個を相妻それぞれに与えた。本当に喜んでそれに拝礼してから、われらは食べた。われにしても今初めて新しい獲物を食べたものだから本当に美味かった。食べながらわれらは楽しく語らった。

## 第6節 固めの儀

「<sup>アマム</sup>米も食べなくなったな。リクンナイの女わが愛しの妻よ、すこしばかり米を炊いてください」  
とわれが言えば、彼女は今まで案じていた心をほっとさせたように立ち上がった。下座に行って水を汲んでザアと手先を洗い清め、よい小鍋の取っ手の根元から水を流して洗ってから、水を汲み入れて炉へ掛けた。二人で炉鉤にかけた鍋の下をフウフウ吹いて火を強くおこした。貯えておいた精米を鍋の中へザアとあげ、少量のご飯を炊きあげ、少し蒸らしてから鍋をおろした。

舶来の上等なお膳とお碗を取り出して膳に揃えてから、よい飯の大高盛りを慎み深く自分の頭のてっぺんまで恭しく持ち上げてわれに捧げた。われは受け取って高くかざし低くかざして拝礼し、ゆったりとした所作で食べた。半分食べ残した高盛飯をリクンナイの女わが愛しい妻にわれが高く差し伸べると、彼女は受け取って拝礼した。それから半分ずつ同量に分けてシバツカイの神の女人に差しのべた。そうしたら、恭しく受け取ってそれに拝礼した。二人とも「わが君様のよき分け前はほんとに美味しい」と言いながらハブハブと舌鼓を打って食べ、食べたあとを手早く片づけた。

わが喉を美しくひびかせこう言った。

「これこれ、神の相妻たちよ。いったいどうして今夜そう思うのか、われはとても淋しい。それゆえ今宵は三人で寝たい。リクンナイウンマツよ。寢床を三つ整えてください。われらは、やはりいつも三人一緒に一つ懐でいたわり合うべきなのだ。何も気後れする者もない。われら三人だけで人目なしに水入らずで、せめて今だけでも落ち着いて抱き合って寝ようぞ」

二人の若い娘は顔を見合わせ、心底喜んでいるものだから、本当に嬉しそうに笑った。リクンナイウ

ンマツは言うより先に立ち上がり、

「なるほど、そうですね。本当にわが君様のご提案はいちばんいいようですわ」

と言って奥に跳んで行って心地よい寝床を整えた。刀鐔の鳴る音を高く響かせ、われは立ち上がった。シバツカイウンマツは炉の火に灰をかけて埋めてから、わがすぐそばに来た。薄造りの上等な兜と神授の太刀をわれは外し、尾錠付き帯を解いて金糸銀糸の豪華な衣装も脱いだ。それらをまとめて金帯で縛り、自分の枕元に置いた。

リクンナイの女わが愛しの妻は部屋の奥側に、シバツカイの神女は炉ぶち側に寝た。その真ん中でわれはまっ裸になり、身ひとつで寝具を掻き分け潜り込んだ。二人の若い娘は肌着一枚だけを身にまとっている。驚いたなあ、たった今初めて女性の匂い娘の香りをわれはかいだのだから。なんとまあ相妻たちの腋の下の匂いや肌の香りはいい匂いだったのだろうか。本当に癒しの気となり薬湯クスリの気マツとなってわれを後ずさりさせた。まことにわが心臓のすみずみまでのびのびとするかのようにわれは思った。

二人の娘の両方の肌着の胸紐をわれは解き、乳房を優しくなで回し手でしめつけた。相妻たちの乳房は何の噂を一緒に聞いたものなのか、全てそっぽを向いている。心の中でひそかに苦笑いしながら、二人の娘の乳房をもてあそんでみると、滑る氷のようにわが手からするりと抜けた。われは哄笑した。なんとまあわれはそれを喜んだことだろうか。二人の娘を奥の方といろりの方の双方にわれは振り向きざま何度も接吻し、われは彼女たちを愛し自分に強く締めつけた。われがそうすれば、お返しとしてわれに接吻しわれを盛大に愛し、われをたいそう強く締めつけ、両方からわれに抱きついた。それこそ本当にわれらは快び合った。たった今初めて父祖代々の寝床、安眠できる母が使った寝床で相妻たちを愛し自分に強く締めつけた。ぐっすり眠り込んでわれは安心している。